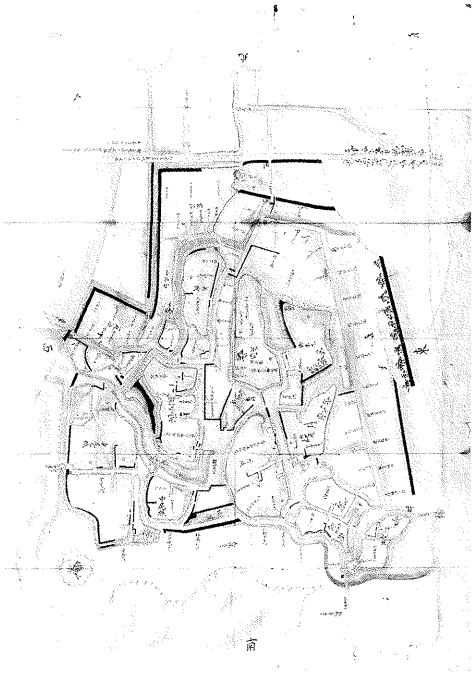
都城市文化財調査報告書第45集

都城市の中世城館（改訂版）

2004年1月

宮崎県都城市教育委員会

《表紙写真》



都之城古絵図（都城島津家蔵）

序　文

都城市は九州東南部の内陸部盆地に位置しています。古くから交通の要衝であっただけでなく、広大な平地が展開しており、11世紀には、のちに日向・大隅・薩摩三ヶ国に拡大し、日本一の荘園となる島津荘が開かれました。

当地の支配権をめぐって、中世から近世初頭には、激しい勢力抗争が繰り広げられましたが、市内にはその遺構として、城跡や館跡が数多く残されています。

近年、さまざまな土地開発によって、それらの貴重な遺跡が破壊の危機にさらされています。

本報告書は、そういった現状を踏まえ、都城市教育委員会が平成２年度から平成15年度まで実施した、市内の主要な中世城郭の縄張り調査と航空写真撮影の成果を掲載したものです。

今後、遺跡の保護をはじめ地域史研究のためにご活用いただければ幸いです。

最後に、ご多忙な中、道なき道を調査され図面を作成していただきました先生方をはじめ、貴重な情報を提供して下さいました地元の皆様に深く感謝申し上げます。

平成16年１月30日

都城市教育長

北　村　秀　秋

例　言

1．本書は都城市内に所在する中世の城館跡に関する踏査報告書である。なお、城館とは山城や館の総称として用いている。

2．本書は城館跡地名表、同分布地図、同立地の概観、関係文献一覧、そして、主要城館の解説と図面および写真からなっている。

3．本書に掲載した図面の作成者および解説文等の執筆者は、次のとおりである。図面作成者は図面脇に付記し、解説文については執筆者名を末尾に記した。

矢部喜多夫、桒畑光博、横山哲英、下田代清海（都城市教育委員会文化課）
重永卓爾（都城市史編さん専門委員・平成14年８月17日死去）
千田嘉博（国立歴史民族博物館）
八巻孝夫（中世城郭研究会）

4．本書の編集は桒畑が行った。

5．城館跡の現地調査および本書の作成にあたっては次の方々のご教示・ご協力を得た。

北郷泰道、吉本正典（宮崎県教育委員会）
能登　健（群馬県教育委員会）
中井　均（滋賀県米原町教育委員会）
上田　耕（鹿児島県知覧町教育委員会）
重永卓爾（都城市市史編さん専門委員・平成14年８月17日死去）
児玉三郎（都城市文化財調査委員）
鳥集忠男（都城市文化財調査委員・平成14年８月24日死去）
大盛祐子

本　文　目　次

Ⅰ．都城市における中世城館の立地……1

Ⅱ．都城市の中世城館一覧……6

Ⅲ．主要城館解説

1．都之城跡……15
2．龍峯寺城跡……21
3．大岩田城跡……21
4．新宮城跡……24
5．梅北城跡……26
6．池平城跡……28
7．六ケ城跡……28
8．安永城跡……31
9．野々美谷城跡……42
10．志和池城跡・森田陣跡……43
11．上大五郎遺跡……47
12．胡麻ヶ野城跡……49

Ⅳ．都城市の中世城館関係文献一覧……50

挿　図　目　次

図１　地形区分と城館の分布図……5
図２　城館立地概念図……5
図３　都城市の中世城館全体分布図……8
図４　城館分布図①（野尻）……9
図５　城館分布図②（国分）……10
図６　城館分布図③（都城）……11
図７　城館分布図④（末吉）……12
図８　上ノ園第２遺跡平面図……13
図９　ニタ元遺跡平面図……13
図10　松原地区第Ⅰ遺跡平面図……14
図11　都之城跡平面図……19
図12　龍峯寺城跡平面図……22
図13　大岩田城跡平面図……23
図14　新宮城跡平面図……25
図15　梅北城跡平面図……27

図16　新城曲輪北側土塁・空堀の断面図……27
図17　池平城跡平面図……29
図18　六ヶ城跡平面図……30
図19　安永城古絵図（都城島津家蔵）……31
図20　安永城外堀平面図……35
図21　安永城周辺古絵図（「庄内軍記」所収）……35
図22　安永城跡平面図……39
図23　安永城全体図……41
図24　野々美谷城跡平面図……42
図25　志和池城・森田陣跡平面図……45
図26　上大五郎遺跡周辺地形図……48
図27　上大五郎遺跡平面図……48
図28　胡麻ヶ野城跡平面図……49

写　真　目　次

写真１　曲輪ⅡとⅢを区切る巨大な堀切16……34
写真２　上ノ園第２遺跡……53
写真３　松原地区第Ⅰ遺跡……53
写真４　都之城跡……54
写真５　梅北城跡……54
写真６　安永城跡……55
写真７　野々美谷城跡……55
写真８　志和池城跡・森田陣跡……56
写真９　上大五郎遺跡……56

Ⅰ．都城市における中世城館の立地

1．はじめに

都城市は都城盆地のほぼ中央部を占めている。同盆地は九州の東南部に位置し、行政的には宮崎県の西南端にあって一部は鹿児島県域をも含む。長径約25km、短径約15kmの楕円状の盆地であり、北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳などを主峰とする山地に囲まれ、西南方のみがわずかに開かれた地勢を呈している。また、盆地中央部を大淀川が貫流しており、梅北川・荻原川・年見川・沖水川・花木川・東岳川・横市川・庄内川・丸谷川・木之川・内川・高崎川などの支流を集めて、南から北へと流れている。

その大淀川を挟んで、東側の山地は比較的急峻であり、起伏が大きく、その裾部にはゆるやかに盆地底へと傾斜する広大な扇状地が発達している。一方、北西に位置する山地は霧島火山の山麓にあたり、比較的ゆるやかなスロープとなっており、その周縁から南にかけてはおおむね平坦で起伏の少ないシラス台地（成層シラス台地）が広がっている（遠藤1981）。

都城市域は歴史的にみると、古代においては日向国の西南端を占める諸県郡に属していた。また、日向国府と大隅国府をつなぐ官道のルート上にあったとされ、延長５年（927）に集大成された『延喜式』によれば、島津駅が設置されていたようである。11世紀代には平季基（大宰大監）によって当市域を中心に島津荘が開かれ、鎌倉時代初頭、文治元年（1185）には島津氏初代の惟宗忠久が同荘の下司職となる。南北朝期以降は、当地の支配権をめぐって、室町政権の動向ともからみながら、相良氏・肝付氏・島津氏（北郷氏）・樺山氏・北原氏・伊東氏などをはじめ、在地の村落領主層を含めた激しい勢力抗争が繰り広げられる。このような状況は北郷氏によって都城盆地ほぼ全域の政治的統一がなされる16世紀中頃まで継続する。さらに、慶長４年（1599）には、島津氏と伊集院氏の対立に端を発した近世初頭の南九州最大の合戦である庄内の乱の舞台となった。

それではこのような地形的・歴史的環境の中で中世城館[1]はどのように展開したのであろうか。

主要な城郭については、八巻孝夫氏・千田嘉博氏らの城郭研究者によって縄張り調査がなされており、それらの調査結果については本書に掲載している。また、最近の発掘調査で平地の方形館跡なども見つかっている。本稿ではそれらの成果に基づいて、城館の構造・規模を類型化したのちにそれぞれの立地傾向と性格を概観してみる。

2．城館の分類

まず、当市域において見られる城館をその構造・規模によって次のように分類し、発掘調査等によって、使用された時期が明らかにされている事例があれば付記した。

・Ａ類　ほぼ同じ面積・標高の曲輪が比較的規模の大きい空堀を挟んでいくつも並立するもの。南九州型（村田1987）・群郭式（八巻1991）・南九州館屋敷型（千田1990）などと呼ばれるタイプに該当する。各地区において要となる拠点的な城郭である。

規模（総面積）によってさらに３つに細分する。

Ａ１類　約200,000㎡前後の大規模城郭

＊具体例　都之城や安永城など。ただし、この規模は主要曲輪の範囲であり、安永城のように遠堀などに囲まれたいわゆる総構の範囲を加えると約300,000㎡を越える。

Ａ２類　約100,000㎡前後の中規模城郭

＊具体例　志和池城や野々美谷城など。

Ａ３類　約50,000㎡前後の小規模城郭

＊具体例　梅北城、大岩田城など。ただし、大岩田城は若干様相が異なり、比較的大きな曲輪が単独であった可能性があり、後述するＢ類（館城）の発展した形とも考えられる。

都之城主郭部の発掘調査の成果によると、14世紀以降に本格的な築城が開始されるようであり、近世初頭まで継続するようだ。

・Ｂ類　ひとつの小規模な曲輪を主郭として、その周囲に土塁をはじめ空堀や若干の腰曲輪を配置しただけのもの。いわゆる館城に該当する。

＊具体例　胡麻ヶ野城（約15,000㎡）、新宮北城（約7,500㎡）、新宮南城（約5,000㎡）池平城（約5,000㎡）など。胡麻ヶ野城の規模は他より群を抜いているが、幅広の斜面部分を除いた曲輪平坦面の広さは約5,000㎡である。

今のところ、発掘調査された例はないが、文献史料に14世紀前半に登場する新宮城は、千田氏による縄張り調査の結果、戦国期に手を加えられている可能性が高い。また、胡麻ヶ野城では曲輪斜面において15世紀後半～16世紀前半の青磁や青花などが表面採集されている。

・Ｃ類　小規模な堀（溝）によって（現状では土塁を確認することはできないが、本来は堀の内側に設けられていたものと思われる。）おおむね方形に囲い込まれたもの。いわゆる方形館。たいていは堀（溝）がすでに埋没してしまっており、発掘調査によって偶然に発見されるケースがほとんどである。なお、松原地区Ｉ遺跡の第Ｉ期例は方形プランの四方の二辺に低地との高度差約10mの崖をそのまま利用し、残り二辺は「L」字形に走行する大溝（堀）を掘削することによって構築されており、Ｂ類への過渡的な様相が看取される。

＊具体例　加治屋Ｂ遺跡（約18,000㎡）、松原地区第Ｉ遺跡第Ｉ期（約5,600㎡）、上大五郎遺跡（約4,240㎡）、上之園第２遺跡（約5,400㎡？）など。

松原地区第Ｉ遺跡第Ｉ期の時期は13世紀後半と報告されている。

・Ｄ類　曲輪（尾根上の削平地）が細長く階段状に連なり、主郭部は一番高い所に設けられる。尾根続きを鋭い堀切で幾重にも断ち切る。いわゆる山城である。

＊具体例　六ヶ城（約4,500㎡）など。

隣町の例であるが、同じタイプに該当する山之口町の松尾城は発掘調査されており、主郭部において15世紀後半から16世紀代の遺物が出土している。

3. 城館の立地と性格

次に、上記のように分類した各城館の分布を地形分類図に重ね合わせ（図１）、それらの立地傾向を示した上で、それぞれの性格についても検討してみる。

Ａ類は、いわゆるシラス台地（盆地中央部では成層シラスと呼ばれる二次堆積のシラス台地）の端部に築城されている場合が多い（都之城・安永城・志和池城・野々美谷城・梅北城）。たいてい主要河川を伴う低地との高度差は20～30mの急崖をなし、天然の要害になっている。台地縁に沿って、あるいは台地の内陸部へと曲輪の拡大が可能であり、台地を縦横にぶつ切りした形で曲輪が配置される。北郷泰道氏の日向城館跡

分類の台地立地型（北郷1994）に該当する。ただし、大岩田城のように一部が台地続きの段丘端部に築城されている場合や都之城の城域南東端に位置する小城のように一部の曲輪が台地下の狭小な河岸段丘におよぶ例もある。

特に、大淀川左岸沿いの台地端部に立地する諸城郭（北から志和池城、野々美谷城、都之城）は、盆地中央部に展開する沖積低地面だけでなく、その東側に林立する山地までも一望できる。また、河川交通を押さえることも容易で、戦略的・経済的に有利な条件を満たしている。14世紀以降は国人クラスや守護大名の一族系統の居城・支城として知られている。

なお、都之城と志和池城は立地する台地の眼下に、いきなり低地面（水田地帯）が展開するのに対し、安永城や野々美谷城では台地下の一段低い面に段丘が存在し、ワンクッションおいて沖積低地へと至る。前者のパターンでは、城郭の背後、すなわち空堀を挟んだ台地の続き部分に家臣団屋敷群や町人集落といったいわゆる城下町空間が形成されていたようである[2)]。一方、後者のパターンに関しては、城郭眼下（台地下）の段丘面に城下町空間が想定され、近世には当該地に地頭仮屋や麓集落が形成されていた。

Ｂ類は、浸食によって独立丘状となった台地（胡麻ヶ野城）や河岸段丘、さらに、台地続きの一段低くなった段丘端部（新宮城）が山地裾部の台地状地形（池平城）に構築されている。低地との高度差は５～10mにとどまる。地形的な制約もあってか、おおむね単郭式となる。曲輪平坦面における居住性は高いが、防御面では空堀・土塁の規模に関してＡ類に劣る。ただし、生産域である水田地帯の経営に関してはＣ類とともに適した位置にある。各地に分出した在地領主レベルの城館であろう。

Ｃ類は河岸段丘の端部（加治屋Ｂ遺跡・上大五郎遺跡）、河川の浸食によって開析され断崖となった開析扇状地の側部（松原地区第Ⅰ遺跡）、さらに、開析扇状地端部の低地に面した微高地上（上ノ園第２遺跡）において発見されている。これらは沖積低地すなわち生産域である水田地帯に隣接しており、館周囲の堀や土塁は防御的機能というよりも、前者には道や水路としての機能が想定でき、後者は完存した例はないが、目隠し的な機能が推察される。これらは、その規模によって、在地領主、村落領主、有力農民などの各レベルに細分することができる。

Ｄ類はいわゆる山城が示すとおり、標高で200mを越える険しい地形の山地・丘陵に築かれている（六ヶ城）。先にあげた北郷氏の分類の丘陵立地型に含められる。急峻な要害を利用し、防御面では優れている。しかし、曲輪の平坦面は狭小で、居住機能は低く、日常的には利用しずらい。付近には陣跡なども認められているように、臨時的な性格が推察されよう。

図２に、これら各タイプの城館の立地条件を都城盆地の地形横断概念図に重ね合わせ、模式的に表現してみた。

4. おわりに

都城市内の中世城館は都城盆地という地理的に完結した空間の中で、多様なあり方が認められる。それらを整理すると、台地端に占地する拠点的城郭であるＡ類は防御面に優れているだけでなく、政庁機能や居住機能も兼ね備えている。それに対し、Ｄ類とした山城は戦略上の臨時的な性格が強い。他方、Ｂ類やＣ類は在地領主、村落領主クラスや有力農民クラスの居館と推察される。中でもＣ類は生産地経営に有利な位置や主要な交通ルート沿いに設定されている。それぞれの役割を十二分に発揮できる場所（位置・地形）に構築されていったことが看取されよう。

いずれにしても、上記のような重層的・複合的様相を呈する当市内の城館群の総体は、南九州における中世城館のあり方のモデルケースとなる[3)]だけでなく、当地域における中世の政治・社会構造を読み解く上で欠くことのできない重要な歴史資料である[4)]。

（桒畑光博）

註

1）ここでは、城や館の総称として用いる。

2）鹿児島県知覧(ちらん)城でも、主要曲輪群（中心グループ）の外側に展開する台地上（空堀を挟んでいるが、標高は主要曲輪群とほぼ同レベル）に、商業町の遺称とみられる字名や町屋を示唆する地名などが残り、それらと地点を異にして武家居住地の存在を示すまとまったブロック地割りも認められており、城主一族など上級家臣団や中・下級家臣団、商工業者等々の居住地が分離した形で存在し、江戸期の麓集落形成以前の城下町を形作っていたと想定されている（上田・砂田1992）。

3）重永卓爾氏は「中世城砦の博物館」であると的確に表現している（重永1986）。

4）従来からその重要性は指摘されているものの、今のところ市の指定文化財となっている城館は本稿でＡ類とした安永城・志和池城・野々美谷城・都之城・梅北城といった主要城郭の一部にすぎない。しかも指定範囲はそれらの城域のごくわずかにとどまっている。

引用・参考文献

上田耕・砂田光紀1992「周辺地名にみる城域」『知覧城跡』知覧町文化財調査報告書第３集
知覧町教育委員会

重永卓爾1986「日向国庄内に於ける中世城郭について」『季刊南九州文化』第29号
南九州文化研究会

遠藤　尚1981「地形区分」『都城・北諸県地域土地分類基本調査　都城』宮崎県農政水産部

桑畑光博編1990『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北西部）』都城市文化財調査報告書第12集
都城市教育委員会

桑畑光博編1991「都之城跡（主郭部）－第１～４次調査概報－」『平成２年度遺跡発掘調査概報』
都城市文化財調査報告書第13集　都城市教育委員会

千田嘉博1990「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号　大阪歴史学会

東　憲章編1995『丸谷地区遺跡群　上大五郎遺跡』丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
都城市文化財調査報告書第31集　都城市教育委員会

北郷泰道1994「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』第20輯

村田修三1987「城の分布」『図説中世城郭事典』第３巻　新人物往来社

八巻孝夫1991「都之城について　縄張検討による現状把握」『平成２年度遺跡発掘調査概報』
都城市文化財調査報告書第13集　都城市教育委員会

矢部喜多夫編1989「松原地区第Ⅰ遺跡」『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』（祝吉・郡元地区区画整理事業に伴う発掘調査）
都城市文化財調査報告書第７集　都城市教育委員会

横山哲英編1994『上ノ園第２遺跡』都城市早鈴東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
都城市文化財調査報告書第27集　都城市教育委員会

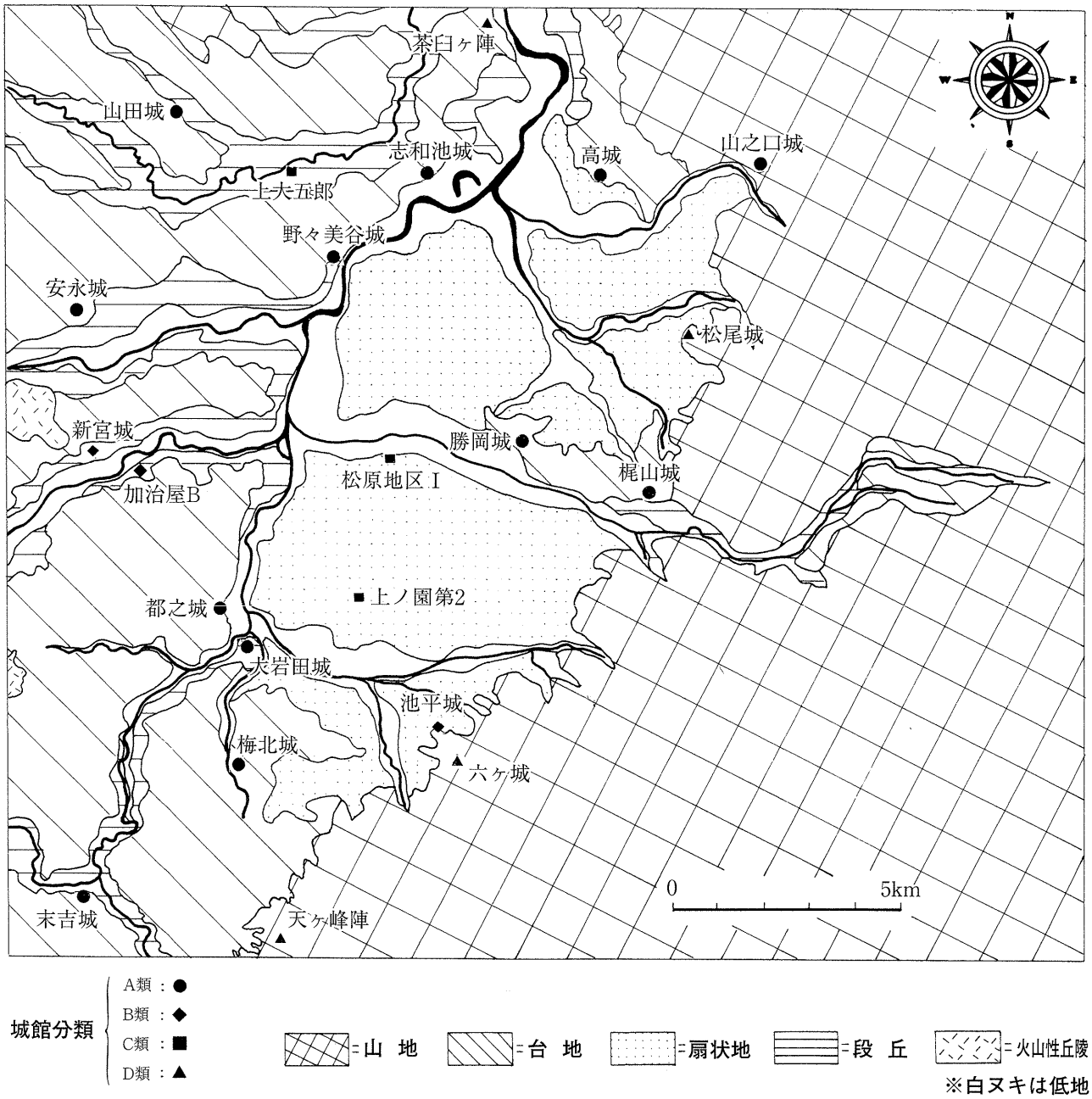


図１　地形区分と城館の分布図

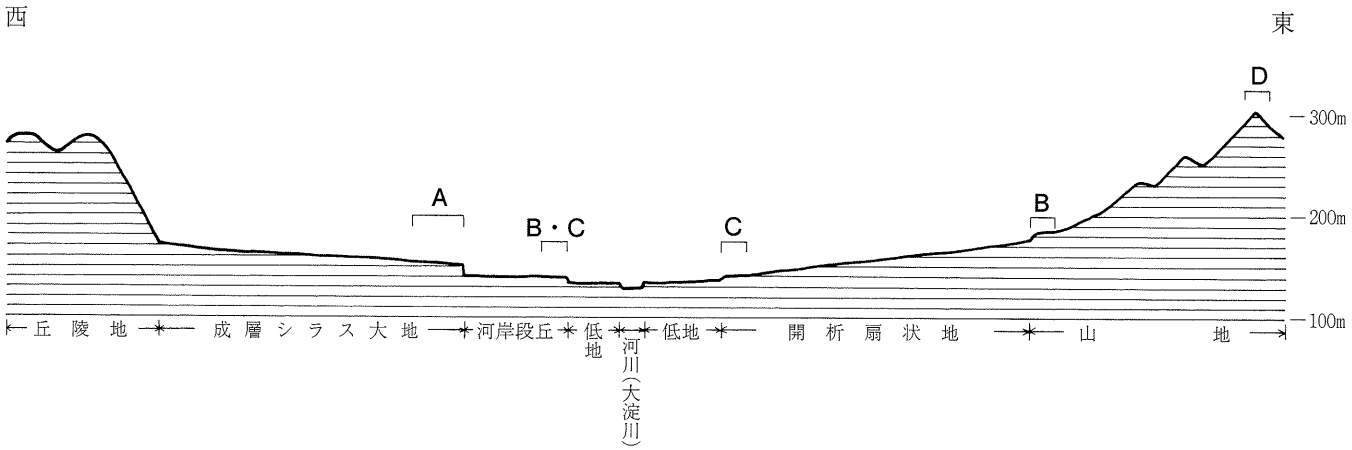


図2　城館立地概念図

Ⅱ．都城市の中世城館一覧

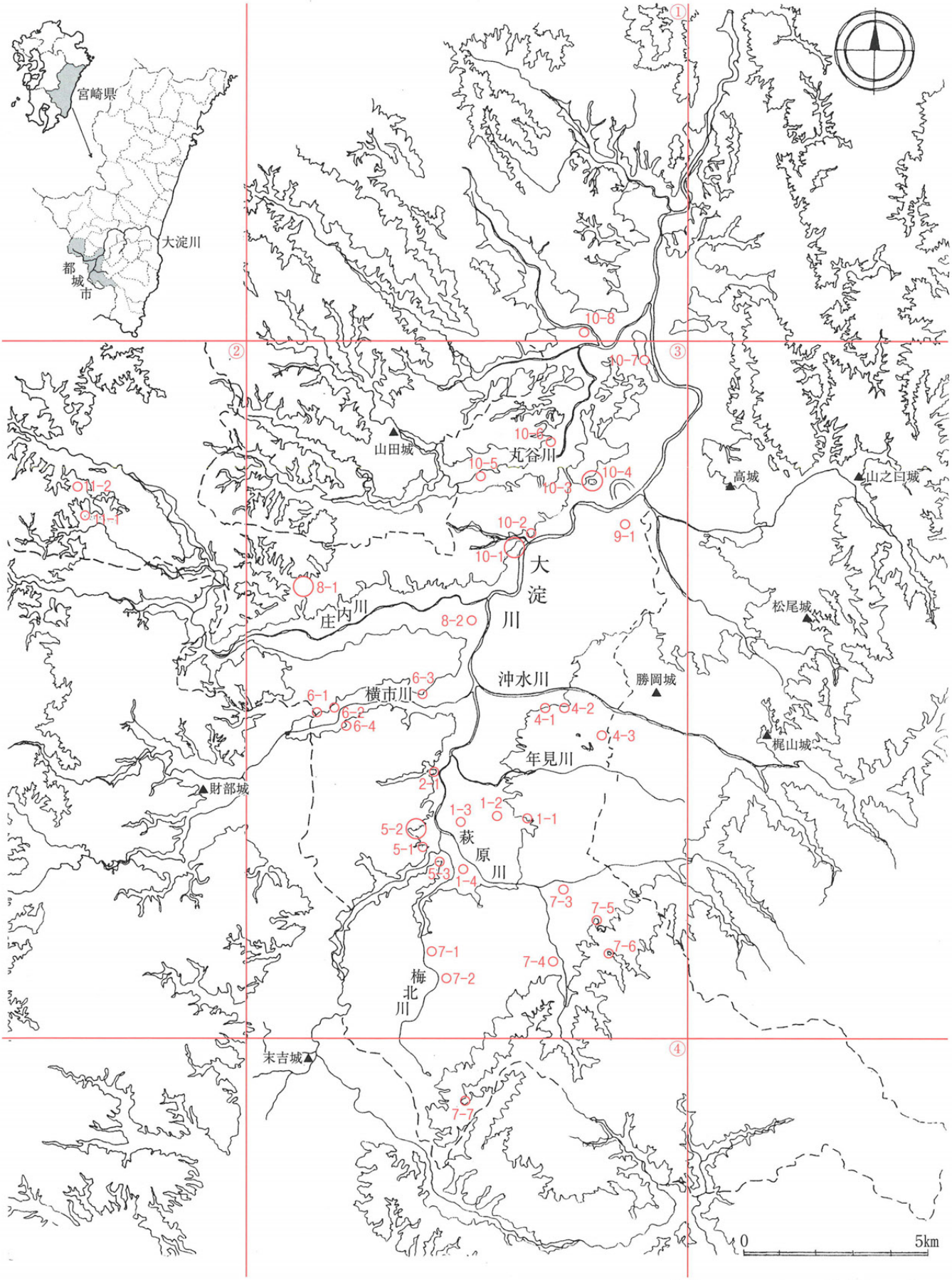
番号	名称と遺跡番号	所在地	現状
1-1	上ノ園第２遺跡［1002］	早鈴町字上ノ園	水田
1-2	＊秋永屋敷跡	早鈴町字鎌牟田	宅地
1-3	姫木城跡	姫城町	宅地
1-4	＊城ヶ尾遺跡［1004］	下長飯町字城ヶ尾	宅地
2-1	ニタ元遺跡	志比田町字ニタ元	大規模店舗
4-1	松原地区第Ⅰ遺跡［4005］	郡元町字松原	宅地
4-2	久玉遺跡［4006］１次	郡元町字久玉	宅地
4-3	＊祝吉御所跡［4015］	郡元町字祝吉	公園
5-1	龍峯寺城跡＝瀬戸ノ上遺跡［5020］	都島町字瀬戸ノ上	墓地・山林
5-2	都之城跡［5027］	都島町字本城・八幡城、 鷹尾町字取添	公園・神社 宅地・山林
5-3	大岩田（大和田）城跡［5029］	大岩田町字大岩田	畑・墓地・山林
6-1	新宮城跡＝畑田遺跡［6033］	横市町字畑田・母智丘谷	畑・山林
6-2	鶴喰遺跡	横市町字鶴喰	水田
6-3	＊蒲生（武範）屋敷跡＝松元遺跡［6046］	志比田町字松元	宅地・畑
6-4	加治屋Ｂ遺跡	南横市町字加治屋	水田
7-1	梅北城跡＝囲内遺跡［7044］	梅北町字囲内・城野首	畑・山林・宅地
7-2	＊下久保遺跡［7036］	梅北町字下久保	宅地・畑
7-3	古城跡＝高野遺跡［7057］	安久町字古城	畑・山林
7-4	東岳寺跡（勝久公逼遺跡）＝上安久遺跡［7054］	安久町字上安久	宅地・畑
7-5	池平城跡［7089］	安久町字池ノ友	山林
7-6	六ヶ城［7088］	安久町字松ヶ迫	山林
7-7	天ヶ峰陣跡	梅北町字金御岳	山林
7-8	＊山之城	梅北町？	山林？
8-1	安永城跡［8047］	庄内町字内城	公園・畑・山林
8-2	馬籠陣跡＝内場遺跡［8007］	乙房町字小松ヶ尾	宅地・畑
9-1	＊高木屋敷跡＝高木赤坂遺跡［9008］	高木町字赤坂？	宅地・畑
10-1	野々美谷城跡［10005］	野々美谷町字古城	畑・山林・神社
10-2	＊児玉屋敷跡＝神竹遺跡［10009］	野々美谷町字神竹	畑・山林
10-3	森田陣跡＝古陣・森田原遺跡［10014］、外堀第２遺跡［10019］	野々美谷町字森田原・古陣 上水流町字森田原・西原・外堀・野首	畑・山林 畑・宅地
10-4	志和池城跡［10020］	上水流町古城	公園・墓地・山林
10-5	上大五郎遺跡	丸谷町字上大五郎	水田
10-6	＊丸谷（某）屋敷跡	丸谷町字山ノ田（中崎）	宅地・畑
10-7	茶臼ヶ陣跡	下水流町字天神原	山林
10-8	岩満屋敷跡＝岩満王子原遺跡［10071］	岩満町字王子原・東田	畑
11-1	胡麻ヶ野城跡＝胡麻ヶ野第３遺跡［11019］	高野町字胡麻ヶ野	山林
11-2	陣ヶ岡山	高野町字前谷	山林

凡例
1）番号の左側は、1は姫城地区、2は小松原地区、3は妻ヶ丘地区（現段階で該当なし）、4は祝吉地区、5は五十市地区、6は横市地区、7は中郷地区、8は庄内地区、9は沖水地区、10は志和池地区、11は西岳地区とし、それぞれに続き番号を付し整理した。
2）［ ］内の遺跡番号とは遺跡詳細分布調査による市内遺跡番号である。
3）＊を付したものは伝承地ではあるが、現在明確な遺構を確認できないもの。

保存状況	指　定	立　　地	標　高　単位：m (　)内低地との比高差	史　　料	発掘調査歴 S:昭和、H:平成	参考文献	備　考
一部破壊		開析扇状地	151.6（1.7）		H.5	2、15	
破　　壊		開析扇状地	147（3.5）	庄			
破　　壊		？	？	旧			
破　　壊		成層シラス台地	150（10）	庄	H.7	3	北郷時久館跡？
破　　壊		成層シラス台地	155.8（15.2）		H.5	16	
破　　壊		開析扇状地	152（9）		S.60	2、4	
破　　壊		開析扇状地	154（7.3）		S.63	2、6	
良　　好	県指定	開析扇状地	160.6（4.2）	庄	H.5	2	島津忠久館跡？
一部破壊		成層シラス台地	152.1（9.3）		H.2、3	2、13	
一部破壊	一部市指定	成層シラス台地 河岸段丘	159.2（19.9）	北・山・都 庄	S.57、63 H.1、2、3、6、7	1、2、7 11、34	
一部破壊		成層シラス台地 河岸段丘	155.9（15）	池・禰・庄		3	
良　　好		北：成層シラス台地	175（25）	池・禰・庄 島		5、24	
		南：河岸段丘	160（10.5）				
一部破壊		河岸段丘	147（5）		H.8、9		寺院跡？
不　　明		河岸段丘	146.5（9.9）	庄		5	
破　　壊		河岸段丘	153（10）		H.13 ～ 14	18	
一部破壊	一部市指定	シラス台地 開析扇状地	165（15.9）	郡・北・山 庄	H.9	3	
不　　明		成層シラス台地	158.2（8.3）			3	平季基館跡？
良好？		開析扇状地	167.3（12.3）			3	
不　　明		開析扇状地	175（2）	庄		3	
良　　好		山　　地	213.4（15.4）	鬼・島		3	
良　　好		山　　地	305（87）	庄		3	
良　　好		山　　地	354（169.7）	山・庄			
不　　明		山　　地	？	庄			
一部破壊	一部市指定	シラス台地 成層シラス台地	196.5（39）	北・都・庄	H.1、5、6、8	9、10 14、36	
良好？		河岸段丘	139.3（4.8）	庄		5	
不　　明		開析扇状地	135（4）？			5	
半分破壊	一部市指定	成層シラス台地 河岸段丘	158.2（25）	禰・大・北 都・庄	H.1	5、8	
不　　明		成層シラス台地？	153.3（20）	庄		5	
一部破壊		成層シラス台地	155（22.5）	旧・庄	H.4	5	
半分破壊	一部市指定	成層シラス台地	150.9（20.9）	荒・北・都・庄	H.7	5	
破　　壊		河岸段丘	142.5（5.2）		H.5 ～ 6	17	
不　　明		河岸段丘	140（5.5）	庄			
不　　明		丘陵地	195.8（72.1）				
良好？		河岸段丘				5	
良　　好		シラス台地	298.8（38.2）			9	「黒木山」
良　　好		山　　地	386.7（113.5）				

4）史料の欄の略語は、次のとおりである。
荒=荒武文書、池=池端文書、大=大脇文書、鬼=鬼束文書、旧=旧記雑録、
北=北郷文書、郡=郡司文書、島=島津国史、庄=庄内地理志、禰=禰寝文書、
都=都城島津家文書、山=山田聖栄自記、

5）発掘調査歴は試掘・確認調査と本調査とをあわせて一括し、その調査年を記した。



※番号は6ページの一覧表と一致
▲は市区域外の主要城郭

図3　都城市の中世城館全体分布図

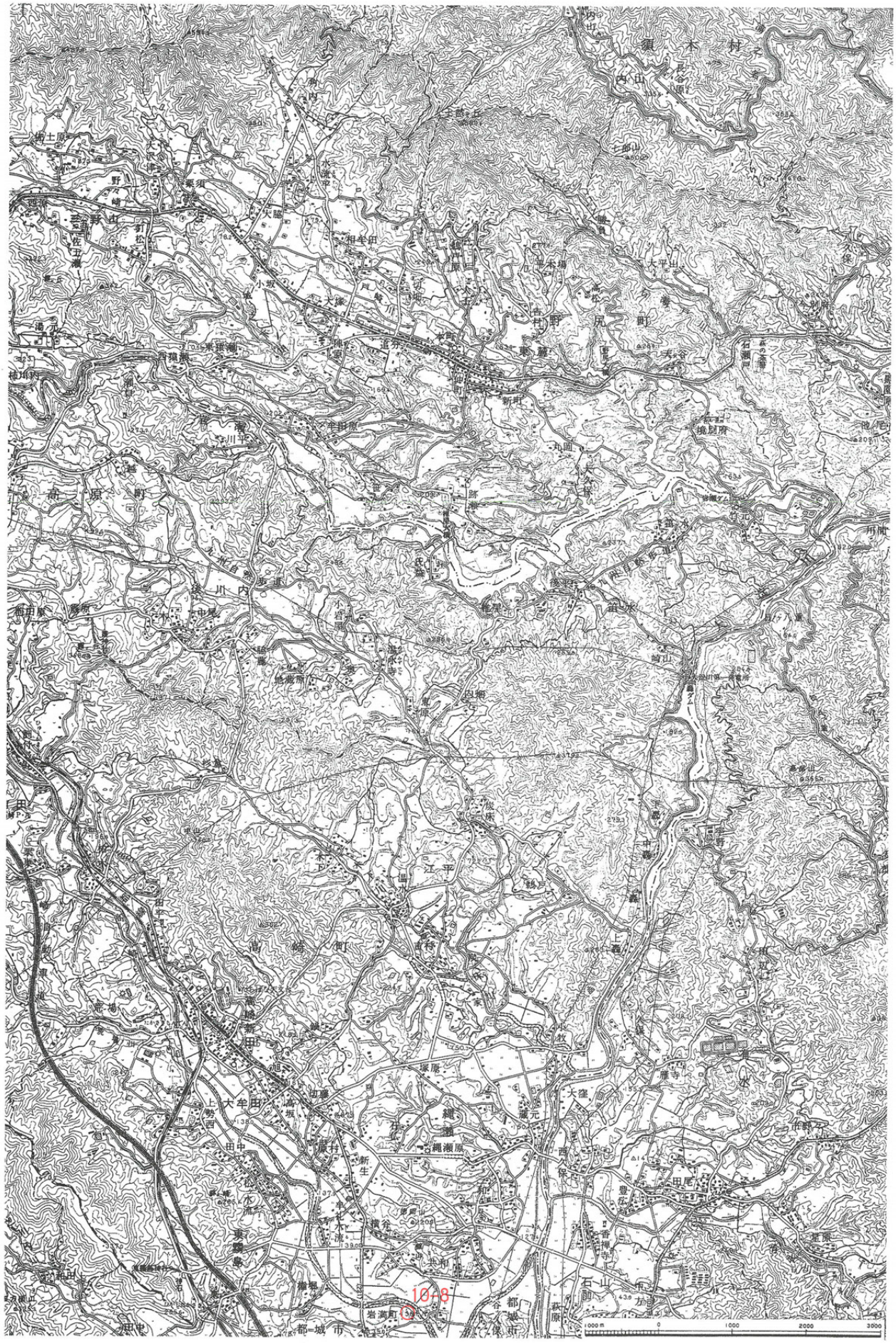


図4　城館分布図①（野尻）

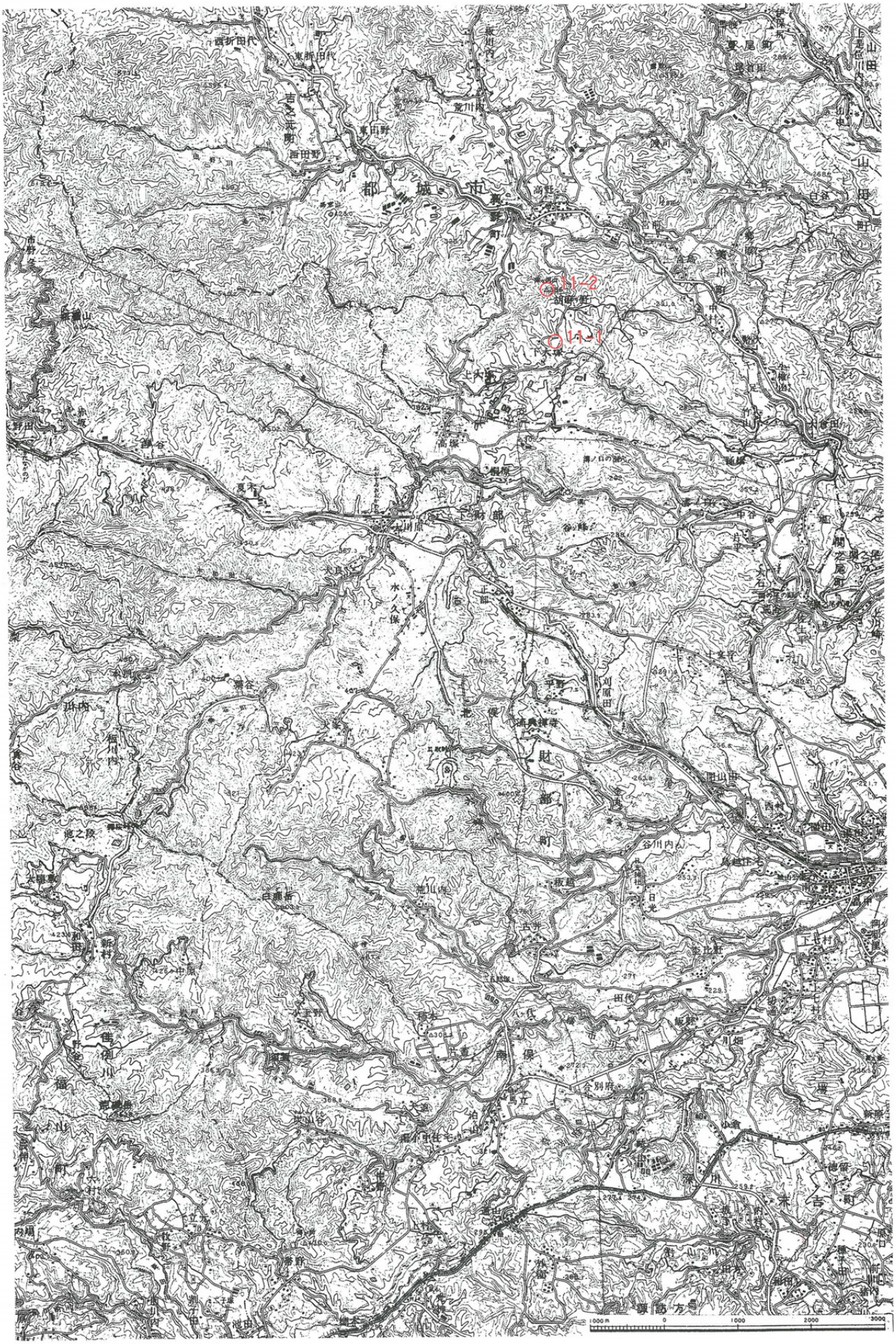


図5　城館分布図②（国分）

10-7
10-6
10-3
10-5
10-4
9-1
10-2
10-10
8-1
8-2
6-3
6-1
6-2
6-4
4-1
4-2
4-3
2-1
1-2
1-1
5-2
1-3
5-1
5-3
1-4
7-3
7-5
7-4
7-6
7-1
7-2

図6　城館分布図③（都城）

図7　城館分布図④（末吉）

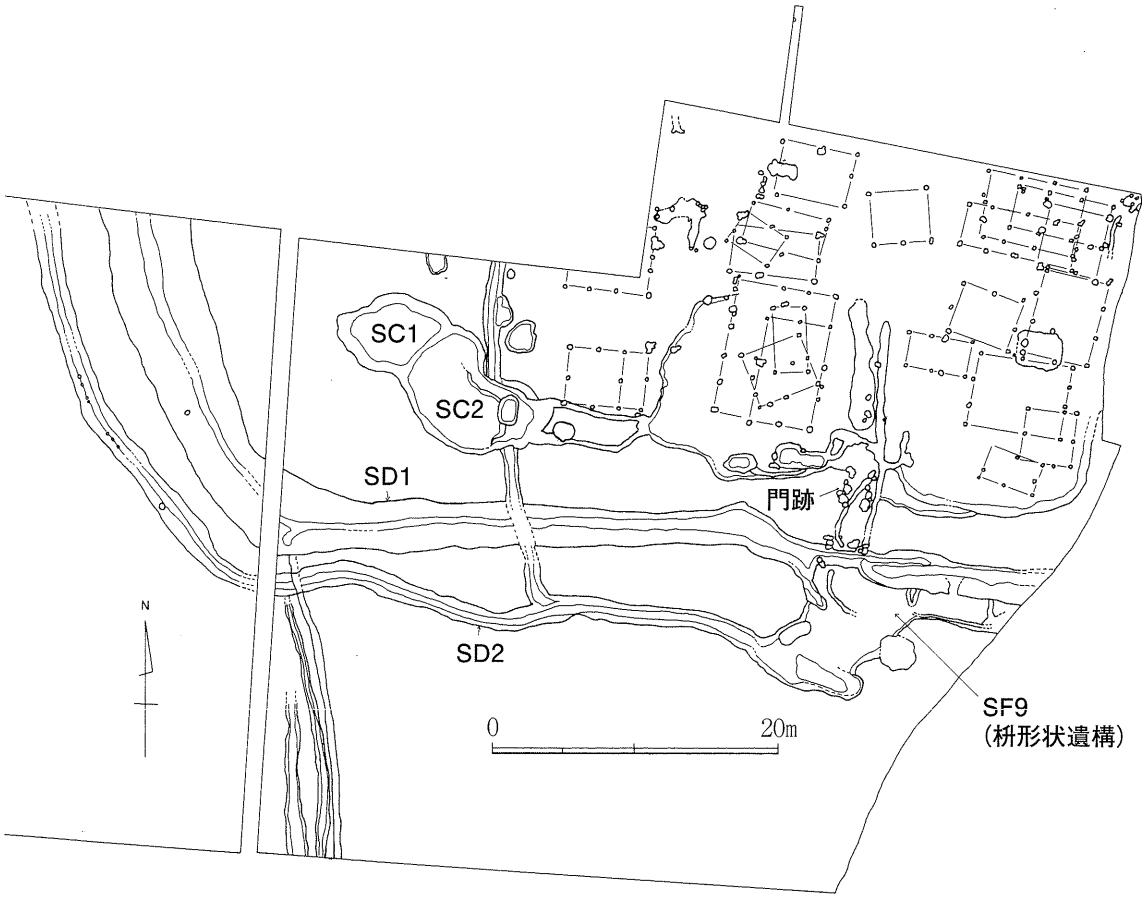


図8　上ノ園第2遺跡平面図　　横山哲英作図

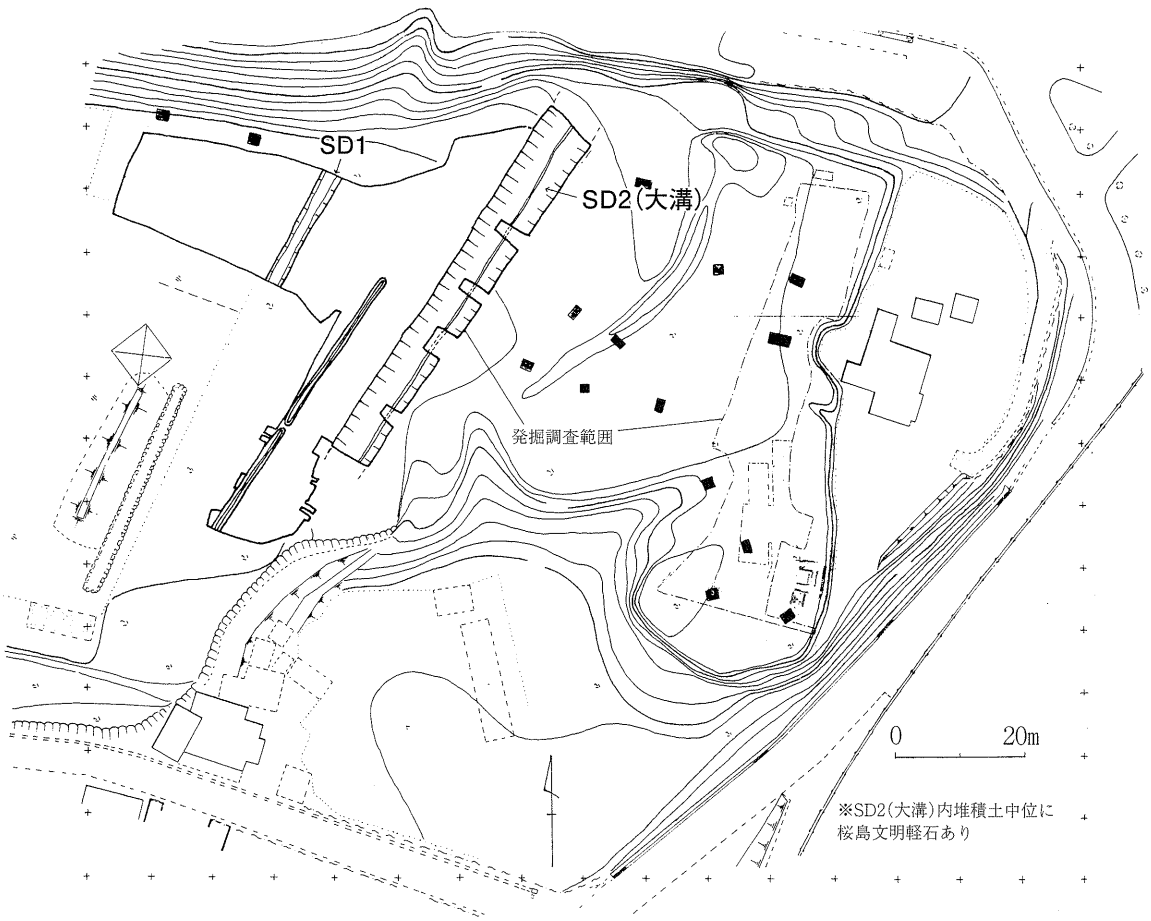
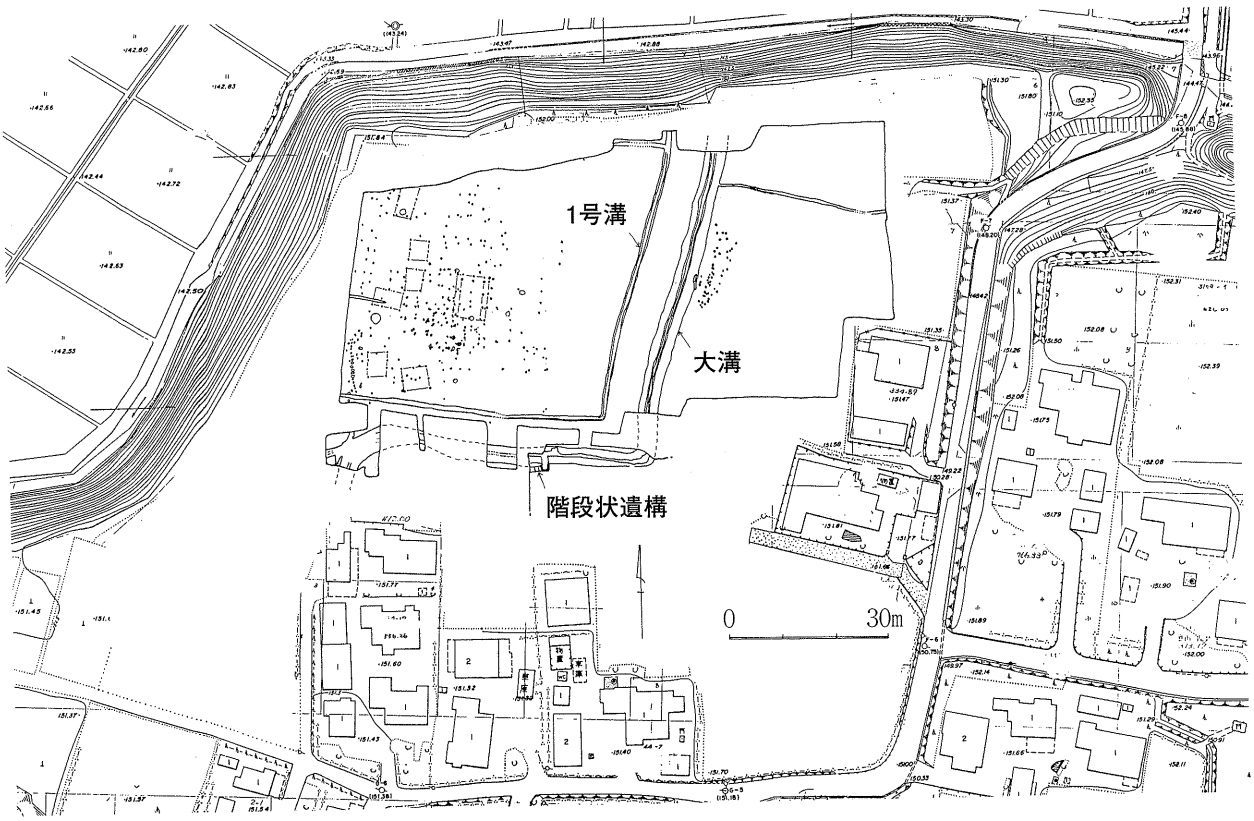
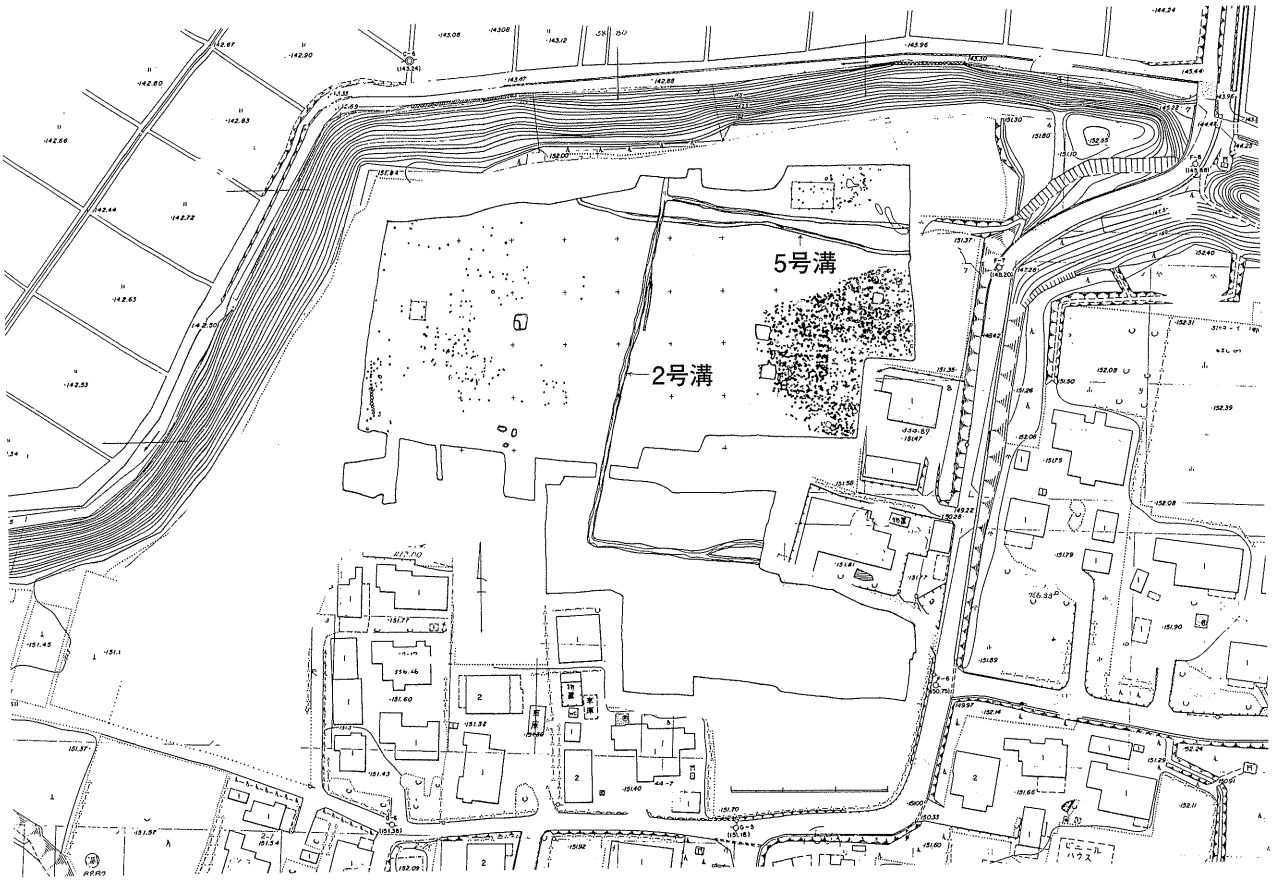


図9　ニタ元遺跡平面図　　重永卓爾原図をトレース



▲第Ⅰ期（13世紀後半）大溝を廻らす館跡



▲第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）2号溝によって区画された館跡

図10　松原地区第Ⅰ遺跡平面図　　矢部喜多夫作図

Ⅲ. 主要城館解説

1．都之城跡（みやこのじょう）※

1）都之城の占地

都之城は宮崎県の南部の大動脈大淀川に面した台地を要害として築城している。現在の大淀川は、城よりやや離れているが、築城時は、本丸の直下を流れていたと考えられる。築城の目的は、都城盆地の領内把握と交通の大動脈の大淀川の確保であったろう。

当初の築城は、大淀川に面する半月状の台地（本丸・西城・中之城・外城・小城のある台地）が自然の谷とつながっている部分（西城と池之上城の間）を、人工の堀によって切り離し、独立させたものである。そして、なおもこの台地をいくつかの堀によって分割し、曲輪を造成したのである（曲輪名はとりあえず、後述の都城古絵図に従う）。

その後、勢力の拡大に伴い、台地続きの池之上城・新城・中尾城などを取り込み、それぞれ堀によって分割し、防御を固めた。

取添は、最終的な時点で、屋敷地の確保のために取り入れたものであるが、城に面した台地縁をL字形に確保した意図の中には、防御の意識もあると思われる。

以上のように都之城は地勢によっていくつかのグループに分けられるが、それは築城と曲輪の増設の伝承とほぼ一致している。これは都之城の拡充が、地形をうまく利用してなされていったことを表している。

都之城の曲輪のグループは、本丸・西城・中之城・外城・小城の「川沿いの台地グループ」、池之上城・中尾城・中尾之城の「台地続きグループ」、そして取添の「台地縁グループ」の三つである。「川沿い台地グループ」が、この城の中核グループであり、当初の築城のものであろう。伝承では永和元年（1375）の築城といわれるが、もちろんこの年に全てができあがったわけではなく、居館が本丸台地上にできただけの可能性もある。なお小城は第二期の造成によるものとされているが、地形的には「川沿いのグループ」に含まれているので、当初から築城されていたかもしれない。

「台地続きグループ」は、中核部のみでは手狭になったためと、中核グループを包むような形の台地（新城など）を残しておくのが不安になったため、そこに築城することにより、この問題の解決をはかったものと思われる。

取添グループも、基本的には第二期の築城と同じ理由であるが、比較的屋敷地を確保する考えが強いと思われる。

2）各曲輪の概要

次に本丸以下の各曲輪について概要を述べるが、それぞれの遺構の解釈には現地調査の成果が当然使われる。しかしそれと同時に「都之城古絵図」（都城島津家所蔵）も使用したいと考えている。この古絵図は[註1]天和二年（1682）以前の成立と考えられるが、現地の遺構と極めてよく一致し、それぞれの遺構を考える上で、また復元する上でも非常に参考になるものである（以下この古絵図を文中では、単に絵図とする）。

Ⅰの曲輪は、絵図では[註2]本丸とされ、実際に中心の曲輪と位置づけられるものである。

虎口は絵図によれば、西側に二つ描かれている。現存の日豊本線よりの道aがそれと考えられる。bは現在は失われている。cは空堀であり、絵図によれば堀底道として使用せず遮断の堀としてのみ使われて

いる。dは絵図に「弓場地」とされるが、これも空堀である。後に弓場として利用したため、「弓場地」と絵図に書き込まれたのであろうが、本来は遮断線としての空堀である。

aの虎口は本丸の最重要の虎口と考えられるが、他の曲輪のように枡形にしていない。アプローチが長いので結果的に枡形の役割があると考えたのであろうか。

曲輪周囲には、西面と南面に土塁があったらしいが、現在は西面の一部が残っている。北の先端の突出した土塁は櫓台の役割もはたしたと思われ、防御上重要な位置を占める極めて貴重な遺構である。

eは腰曲輪である。本来はここに降りるための枡形虎口があったが、ある時期埋められているのが発掘により発見された。なぜこの虎口を埋めたかは不明だが、軍事的緊張により、虎口の閉鎖を必要とした可能性も考えなければならないだろう。

fは崩れであるが、この地点が外へ出るための虎口の可能性もある。曲輪面の枡形を埋めた段階で一緒に壊されたとも考えられる。

Ⅱは西城とも呼ばれていて、現在の狭野神社の地で、絵図には明屋敷・台（代）官所などの記載がある。明屋敷は、空屋敷の意で、絵図の成立当時既に使用されなかった屋敷であろう。とにかくここに代官所などの政治施設があったと推定できる。

虎口はg地点であるが、既に破壊されている。hは現在の登り口であり、神社のできた時に作られたものであろう。

Ⅲの中之城は、既に破壊されている。しかし南端の一部ではあるが遺構が残っている。iは枡形の残存であり、ほとんど失われた中之城の遺構として貴重である。jは虎口に至る通路の残存遺構と思われる。これも絵図に記載されているが、絵図では判然としない。

Ⅳの外城もほとんど宅地化で、遺構は失われている。

Ⅴは南の城であるが、ここも早い時期に削平され遺構はほとんど残らない。

Ⅵは小城といわれる地であるが、残念ながらここは調査できなかった。

Ⅶは池之上城と呼ばれていた。名称の由来は西と南に面してあった水堀の長池からであろう。この曲輪は、南の一部が日豊本線によって破壊されているのみで、極めて良好に保存されている。虎口はkとlであるが、いずれも枡形としている。特にkは枡形の雰囲気がよく残っている。ただし、曲輪内に入るのは、右折するように絵図には書かれているが、このあたりはよくわからなくなっている。mは空堀状になっているが、絵図には井戸があったように書かれている。nは空堀である。長池に面した側に何らかの防御上の不安（この長池は自然の谷筋であったと思われるので、側面がなだらかであったため防御上不利と考えられたのであろう）を解消するために、この城としては異例の横堀を掘ったものと思われる。堀の土塁は保存も良好である。

Ⅷは新城の地であるが、ここも住宅地として開発され遺構はほとんどない。わずかに、oが新城の曲輪面の一部とみられる。pは土塁で、これは保存がよい。

ⅡとⅦ・Ⅷに囲まれた地は、屋敷地として使われていたらしい。特に都島のあたりは土塁囲みの屋敷地となっている。東側の地は入り口が枡形になっておりかなり重要な人物の屋敷地であったと考えられる(絵図では伊作太郎左衛門と記されている)。現在、遺構は全く失われているが、都島の小丘のみ残存している。

Ⅸは中尾城の地である。都之城の曲輪の中では最も小さい。遺構の残存はすばらしく、ほとんど完全に残っている。qは枡形で、登り口の取り付け部分は民家によって壊されているが、枡形そのものはよく残っている。正面にぶつけて鍵形に曲がるようにしている。rは土塁でこれも良好に残っている。この土塁は池之上城の横堀と同様長池とrの空堀の遮断線の強化のためで、城内の防御の中で特に重要な位置づ

けがしてあったと思われる。

Ⅹは中尾之城・中尾城の地で、Ⅸの中尾城と同じ曲輪名であるが、その同名にした意図は不明である。もしかしたら、本来同一の曲輪であったのを、長池につなげるようｓの空堀を入れて独立させ前線の橋頭堡的な役割の曲輪としたのかもしれない。

Ⅹの曲輪は、日豊本線により二つに分割されているが、ちょうどこの地点に本来は空堀状の通路があったらしい。通路といってもかなり大規模なもので、絵図の書き方からすると、ｓに匹敵する大きさである。この空堀道はそのまま西にいくと大きな枡形につきあたり、中尾口と称されていた。ここが大手口の役割を果たしていた。

Ⅹの南の中尾城は、日豊本線の側が著しく破壊されているが、他はよく残っている。特に東南のエリアがよく残っている。ｔは枡形の遺構である。ｕは空堀で枡形への通路の遮断のためのものであろう。ｖは削平地で階段状に小曲輪を置く。絵図には二重・三重・四重・五重と書かれ、四段の小曲輪を描くが、現状では二段のみ残っている。

Ⅹの北部の中尾之城も保存度は良好である。特にｗのエリアがよく残る。ほぼ絵図通りに残存しており貴重である。ここは枡形ｙに至る道を防御している。ｘの土塁も極めてよく残存している。ｚも虎口である。ａ´は竪土塁で腰曲輪内の移動を遮断している。

ｂ´は堀切で極めて大規模である。遺構もすばらしい上よく残っている。この堀切が台地と切り離す役割を果たしていて、城内の数多くの堀の中でも最重要のものといえよう。ｂ´の堀切は北側のものが堀底を階段状に造成している。

ｃ´は絵図に島状に書かれているものである。Ⅹの中尾城に続く細い台地なので、いくつかの堀切で分断したものであろう。台地上は自然地形で城として使う気はなかったようである。ｄ´は小さい堀切で、台地から切り離している。

Ⅺは取添と呼ばれる曲輪で、最も最後に作られた曲輪である。現在はほとんど堀は埋められている。しかし地割などに堀の形跡は残り、ほぼ位置は推定できる（斜線部がその推定の堀である）。

曲輪内も遺構はほとんどないが、用水路（かつての川で堀として利用していた）沿いに遺構が残っている。ｅ´は島津家の墓地で、土塁で囲まれていたと思われる。ｆ´は堀状の通路の残存である。ｇ´は土塁囲みの空間であるが、絵図の坂元甚五左衛門の屋敷地に比定できる。南面しているので、木を切り払えば住環境は良いはずである。ｈ´のあたりはいずれも屋敷地である。ｉ´は堀切で鷹尾口の防御のためだろう。

３）都之城の遺構

以上見てきたように、都之城は破壊されたイメージが強い割には、意外と遺構は残っている。特に本丸・西城・池之上城・Ⅸの中尾城・Ⅹの中尾之城・中尾城はそれぞれよく残存している。取添も川沿いの部分はよく残っている。

それぞれの曲輪の虎口がよく残っているのもこの城の特徴であろう。池之上城・Ⅸの中尾城・Ⅹの中尾之城・中尾城の虎口の枡形はほとんどが無傷で残っている。その数は六つに及んでいる。南九州の城は一般に明瞭な虎口が少ないが、この城では表面観察と江戸期の絵図がよく一致し、いずれも枡形と確認できるもので、極めて貴重である。

ｓ´とｂ´の堀もよく保存されている。いずれも大規模な工事がうかがえ、圧巻である。これらの堀は先人の遺産として広く市民に知らせる必要があろう。

4）絵図について

天和二年以前の作製とされる絵図は、現状の遺構と極めて一致し貴重である。既に破壊されている部分も、この絵図の記載により推定復元も可能である。この絵図と現状の遺構をよく対応させて読み込んでいけば、都之城の細かい遺構の意味を明らかにすることも可能になろう。

次にこの絵図の大きな価値は、曲輪の使い方が推定できる点である。南九州のこのような同等の曲輪を大量に作る城は、まだいい用語はないがとりあえず「群郭式城郭」[註3]と呼ばれている。こうした城郭の曲輪がどのように利用されていたかは、日本城郭史の大きな課題であるが、この絵図によれば、曲輪内はいくつかに分割されそれぞれに重臣が居住していたらしい。それぞれの重臣がはたして実際に居住していたかどうかは、これからの研究による以外はないが、少なくとも江戸の初期にはそのような伝承があったのであろう。これは現存する曲輪に入る枡形を見ても防御に有利なようにすることよりも、屋敷割の通路に合わせているらしいことも傍証となろう。

この都之城から遠く離れた青森県の浪岡城[註4]も、いわゆる「群郭式城郭」として知られている。この城は北畠氏の居城で八つの曲輪で構成されている。その内の北館（きただて）という曲輪が発掘された。この曲輪内は八つほど（時期によって違う）に屋敷割されそれぞれに家臣が居住していた。この曲輪内は一定グループがいたと考えられているが、これとほぼ同様の様子が絵図からうかがえる。もちろん都之城の場合同一曲輪に住む家臣がそれぞれの曲輪でグループ編成されていたかどうかは不明であるにしろ、現象的には似たような形で集住していたのは確実である。これは日本の城郭を考える上で、極めて重要な問題を提起すると思われる。なおこの遺構は廃城時の江戸初期のものではあるが、その限界性を考えた上で、発掘の成果も含めれば、中世末の姿も類推できよう。

この絵図の読み取りは、先に述べたようにこれからの課題であるが、この絵図と見事に対応する城郭が、一部は破壊されながらも、なお大部分の遺構を残しているのは、極めて喜ばしいことである。遺構の分析と絵図の検討が進んでいけば南九州の城の意味とそれと関連する権力構造に肉迫することも可能である。

残る遺構の保存と有意義な整備を期待したい。

（八巻孝夫）

註

1……この絵図にはほぼ同様の図が二面存在し、その内の一面が天和二年写とされるので、天和二年以前の成立は間違いない（重永卓爾氏の教示による）。しかし、絵図の成立時に既にほ「明屋敷＝空屋敷」などの記載があり、他の場所でも建物が使われていないと思われることから、絵図の状況は廃城の元和元年（1615）に近い時期を表していると考えてよいだろう。

2……本丸は比較的新しい言葉であり、近世初頭の畿内で使われ始めたと考えられる。従って都城の場合、中世は主郭が「本丸」と呼ばれていた可能性は少ない。この絵図の「本丸」の名称は少なくとも天正末年に至って使われだしたものであろう。

3……『群郭式城郭』の名称は用語としては問題があるが、とりあえず仮称として使用する。比較的大型の曲輪が多く並ぶタイプという。村田修三氏は「辺境型」（『図説中世城郭辞典』新人物往来社、1987年）と仮称し、また千田嘉博氏も「九州館屋敷型」（「戦国期城郭・城下町の構造と地域性『ヒストリア』第129号、1990年）と仮称したものと同じものをさす。

4……工藤清泰「浪岡城跡の発掘調査成果から見た北日本における中世城館研究の課題」（『よねしろ考古』4号、1988年）

※文献34を一部訂正の上再録した。

都　之　城

宮崎県都城市都島町

調査／1991年1月19～21日

作図／八　巻　孝　夫

※地形図は、都城市都市計画図（1/2500、昭和56年測量）を基にしたが、現地調査により、一部修正した

※「小城」は桑畑光博氏の調査成果による。

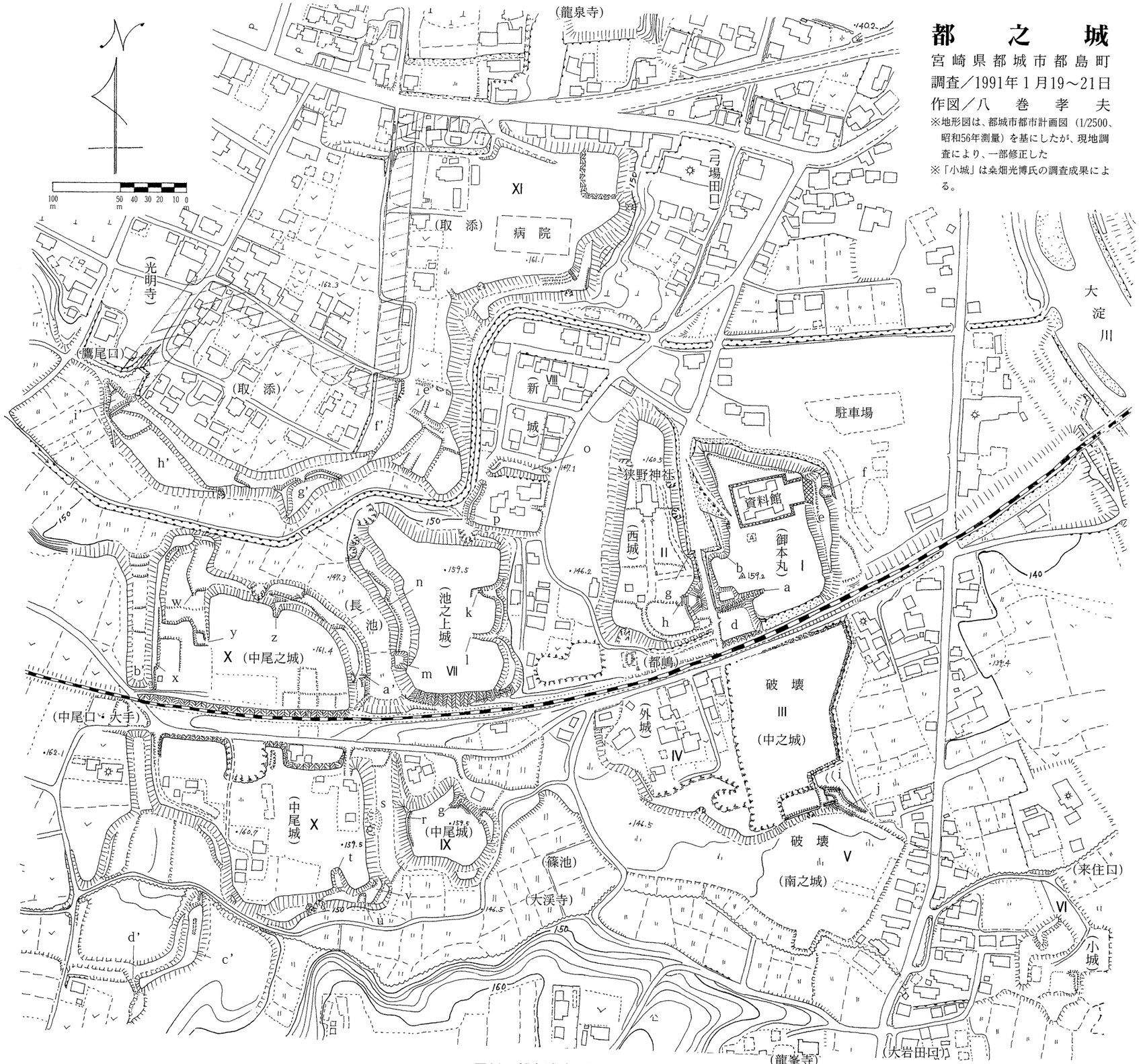


図11　都之城跡平面図

2．龍峯寺城跡（りゅうほうじじょう）

都城市都島町にあり、すぐ北側の谷を挟んだ場所には都之城が広がる。龍峯寺墓地の東側の台地端部に、城郭遺構がきわめてよく残る。地表面から観察可能な城郭遺構の西側から宅地開発が迫っており、東西60m×南北200mの範囲に複雑に組み合わされた堀と土塁・曲輪が展開している。都城市教育委員会の発掘調査によれば、現在視認できる遺構の西側の台地上で堀などを検出しており、全体像は不明ながら、何らかの関連遺構が台地上に伸びていたことは間違いない。戦国・織豊期に整えられた遺構である。

遺構は中央の東西方向の堀によって、北側と南側に二分される。北半部では、北東の台地下に降りる道が大きく屈曲するところに、突出した曲輪があり、北に向かって土塁を備える。この突出した曲輪の東側には堀があり、堀の東に、東西30m×南北80mの大きな曲輪がある。この東にさらに幅８m程の堀が伸びる。南側の一部が埋め立てられているが、よく遺存し、北端は台地端部に開口する。この堀の東には、土塁を備えた曲輪と堀西側より一段高い曲輪が配置されている。このことから、明らかに西側を城外とした設計であったことが確認できる。北東部分には尾根が伸び、削平地がつづく。

南半部では中央の東西堀から南東に130mにわたって台地端を区切る堀が伸びる。堀の東側には北半部と同じように土塁と帯状の曲輪がつづく。中央の東西堀に近い部分では、台地東側の旧龍峯寺の側にも堀をめぐらし、堀には対岸土塁が添えられる。こうしたことから、やはり西側を堀と土塁で守られた台地端部の帯状に伸びた曲輪が、もっとも上位の曲輪であったことが確認される。

こうした城の構成からは、龍峯寺城がいわゆるふつうの城ではなく、きわめて軍事的な比重の高いものであったこと、さらには都之城の南の台地端部を、大淀川の蛇行地点まで確保することに目的があったことを示している。都之城の外郭あるいは惣構えとして理解すべきであろう。（千田嘉博）

3．大岩田城跡（おおいわだじょう）

梅北川と大淀川の合流点を間近に望む、比高約15mの台地上に大岩田城は位置する。河川交通と、おそらく河川の渡河点を押さえ得た好立地であったと考えられる。城域北側は国道10号線によって一部が削られ、南東の一部は旧志布志線の線路敷きによって改変を受けている。しかし、大部分は畑と墓地になっており、保存状況はきわめて良好である。大岩田城の歴史は古く、はやくも暦応２年（1339）の文書に確認できる。またこの城は、大和田城とも呼ばれたことも知られる。

城域南端の台地続きには幅約10mの堀切りがあり、その内側には土塁の痕跡が観察される。堀と土塁の規模から考えて、少なくとも15世紀以降の改修が推測される。堀は東半分が埋め立てられているが、地境と道に挟まれた帯状の地割りから復原できる。また、主要部の北側は、一段高い曲輪になっており、通称「弓場」（ゆんば）と呼ばれている。弓場北側は、もともと台地の上位面が落ち込んだところで、防御に適していた。自然地形に手を加えた急斜面の「切岸」に加え、堀があったかは国道のため不明である。

南の堀切りと北の弓場に守られた方形の部分は、城内のもっとも主要な曲輪で、東西100m×南北100mの規模であった。この主郭東側には、一段低い帯曲輪があり、その半ばに堀状の切り込みが見られる。現況では、主郭上面に堀が伸びていた様子は認められないが、本来、主郭に出入りするための堀を利用したスロープ状の堀底道がここにあった可能性が高い。

梅北川と大淀川の合流地点に張り出した台地の突端部周辺は、ゆるやかに高まり、城域に含まれておかしくない。現況は、新しい時代の改変を含めて小規模な段差がいくつか認められる。しかし、城郭であった痕跡を明確に地表面観察からつかむことはできなかった。（千田嘉博）

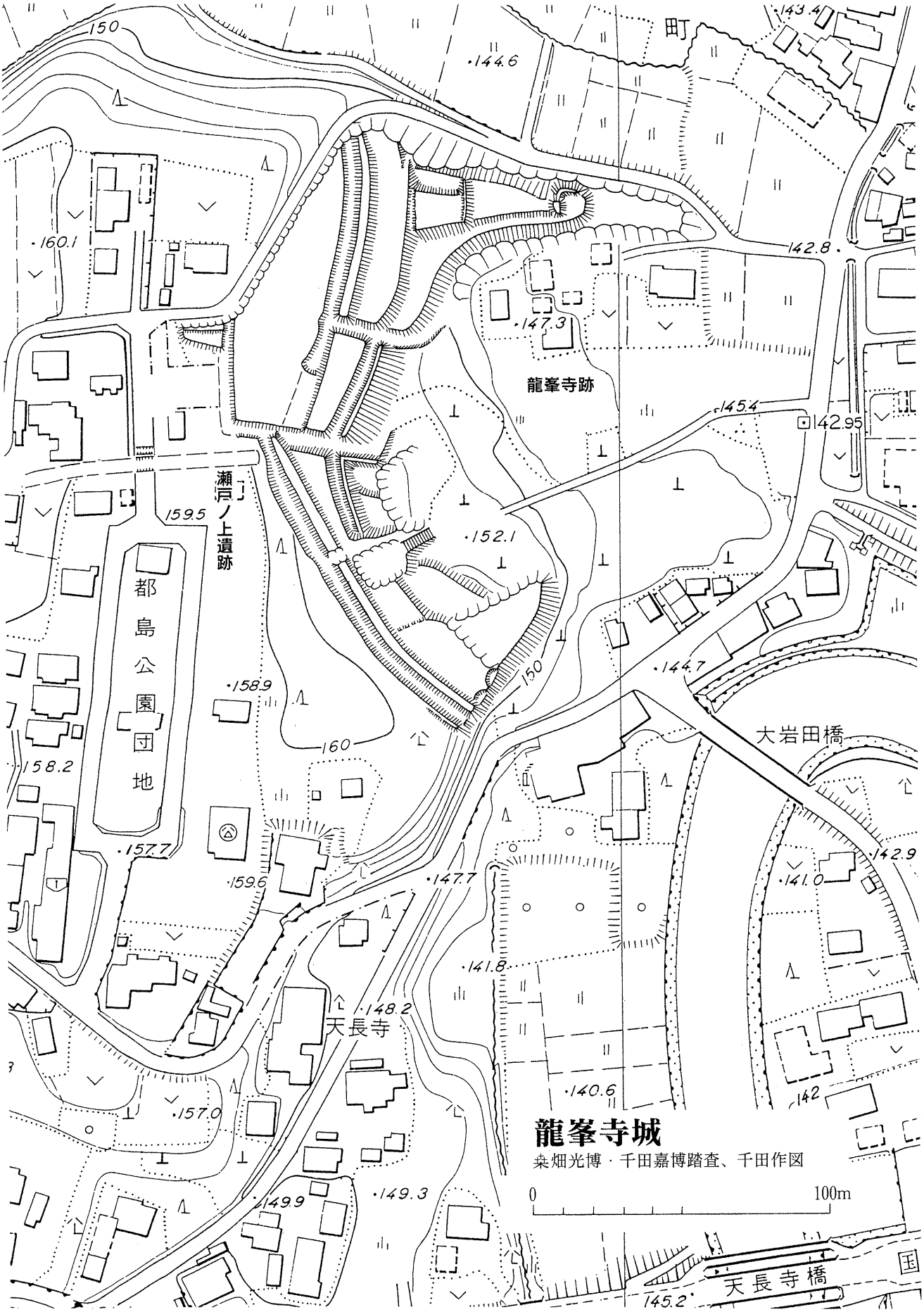


図12　龍峯寺城跡平面図

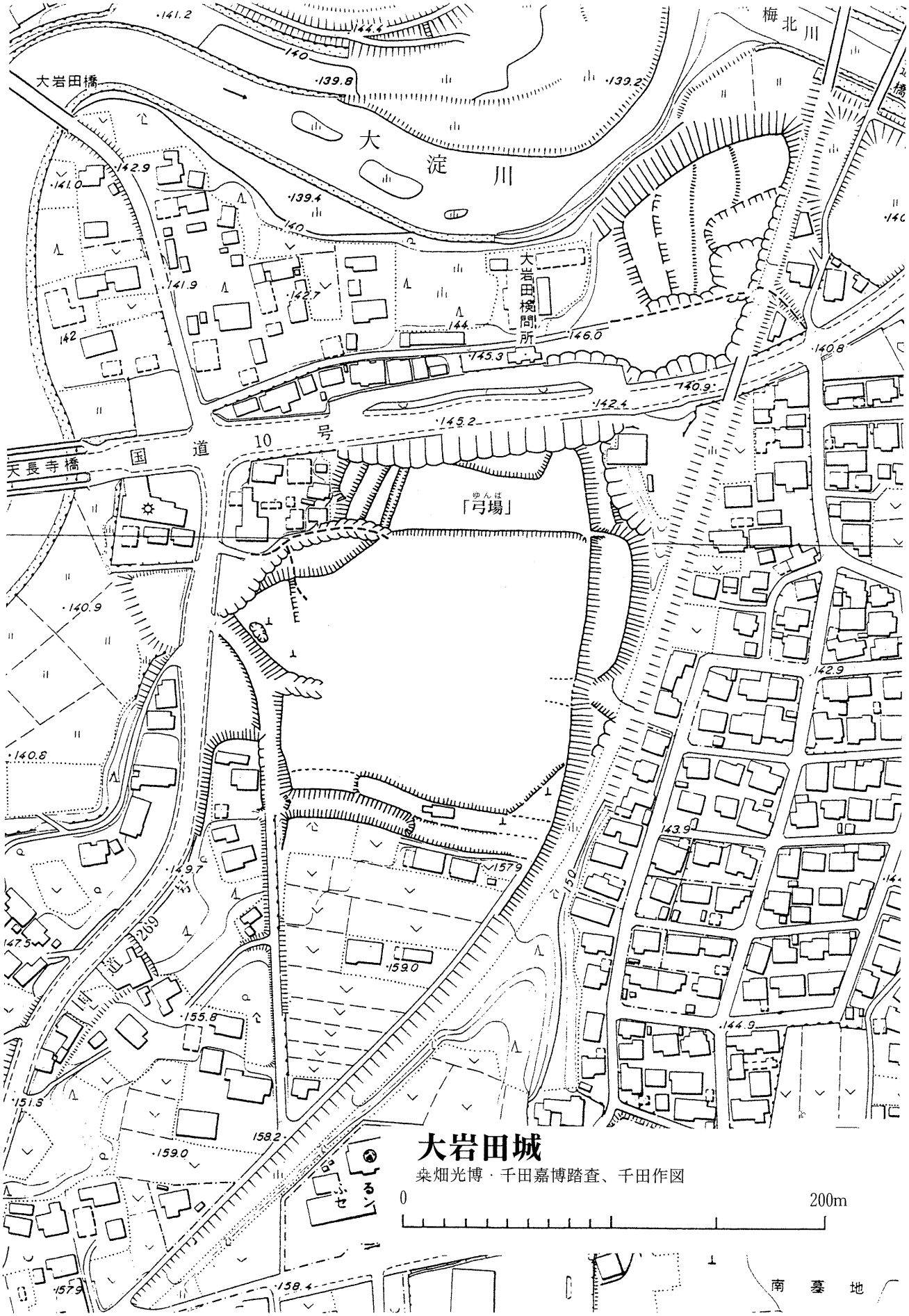


図13　大岩田城跡平面図

4．新宮城跡（しんぐうじょう）

新宮城跡は、都城市横市町に所在する中世の館城（やかたじろ/かんじょう）である。館城とは、館と城の中間的なものを呼び、中世においては本格的な山城を築くことのできなかった村落領主の拠点として、関東から九州北部において広く使われた。つまり、館を基本にしながら、ある程度、城としても機能するように工夫されたのが、館城なのである。

しかし、南九州地域では、都城・野々美谷城のように台地上に大形の曲輪が連続する城郭は見ることができるが、新宮城のような館城は、従来まったく知られていない。もちろん、このことは南九州に村落領主がいなかったことを示すのではなく、いわゆる武士的身分の居住地がそれぞれの地域の拠点的城郭にはやくから集約される、といった南九州の中世社会の独自性の表れ、と考えるべきである。

このように、基本的に南九州では、ある段階から畿内地域ではごく一般的であった館城の造営が規制され、拠点城郭へ収れんしていったから、典型的な館城である新宮城の遺跡は、都城市だけでなく、南九州の中世城館の展開を検討する上で、きわめて貴重な城跡といえるのである。

つぎに新宮城の細かな構成を見ていきたい。新宮城は丘陵の北端と南端に明瞭な城郭遺構を見ることができる。ここでは、仮に北城と南城と仮称して記述を進めたい。北城では１が主郭（近世の城郭でいえば本丸）である。主郭のまわりには幅が10ｍを越える堀がとりまき、きわめて厳重なつくりである。主郭への進入を防ぐため、主郭まわりの斜面（切岸という）は、鋭角に仕上げられ、今日も完全な状態で残されている。現地を訪れた人は、中世の城の様子を鮮やかに体験できるであろう。ａの部分は主郭をとりまいた堀の底に大きな段差を付け、さらに土塁を備えている。主郭出入り口であるとともに、このことによって主郭まわりの堀底が通路として使われていたことがわかる。

２の部分は１の前衛にあたるところで、ａから堀底をつたってきた通路の出入り口も２の北側の土塁開口部に設定されている。２の西側には１の堀つづきの帯曲輪が備えられ、現在は西の谷へ降りる通路と重なっているが、南側には堀が本来あったと考えられる。

このように、１・２を中心とした北城は、館城のプランを基本としながら、要害機能を発揮できるよう、よく工夫されていた、と評価することができる。保存状態は完全である。

１・２の南側、明らかに城郭とわかる４・５の北側に位置した広い削平地３は、地表面観察では特別な土塁などを確認することはできないが、城主の平時の館や従者の宅地などが設けられていた場所と考えることができる。３の周辺も新宮城の一部、と見る必要がある。

南城は北と東側に２重の堀を巡らす。外側の堀は浅く、また幅も狭いからもっぱら通路として使われたのであろう。内側の堀は北城の主郭まわりの堀に匹敵する大きさで、４の西北で竪堀になっている。丘陵上だけでなく丘陵斜面を伝って城内に敵が近づくことを防ぐ、細やかな工夫である。４は完全に三方を土塁で守られる。ｄは東から城内に入る恰好の通路に現在なっているが、江戸時代以降になって４の場所に社が祀られるようになってから、参道がつくられており、その影響が少しあると思われる。

５も４からひとつづきの土塁で守られ、ことに丘陵側の東には２段構えの土塁を設けている。ここはまとまった広さがあり、屋敷地としても使用されていたと考えられる。現在、堀底から窪地状になって５に入る溝が見られるが、これこそ本来の城の出入り口である。

南城で注目されるのは丘陵の南端の部分にわざわざ堀ｅを掘り、土塁をめぐらせた曲輪６を張り出して築いたことである。堀ｅは途中で鍵の手に曲がっているが、これは堀底に進入した敵の側面を突くための「横矢」の折れで、戦国時代にならないと見ることができない高度な防御の技法である。南九州の城でこうした折れが確認できるものは、ひじょうに少ない。

このように新宮城は、南九州では類例のほとんどない館城形式の城である上に、北城・南城とも遺構が完全な状態で残る。さらに、いわゆる堀や土塁で守られた狭義の「城」部分だけでなく、新宮城の城主あるいはその一族が北と南の城をうまく関連づけながら丘陵全体の城郭化を試みていたことがわかるなど、特色が明瞭である。徹底した都城市内の中世城館の地表面観察調査でも、新宮城と同じタイプの城郭は発見されておらず、歴史的価値はきわめて高い。　　（千田嘉博）

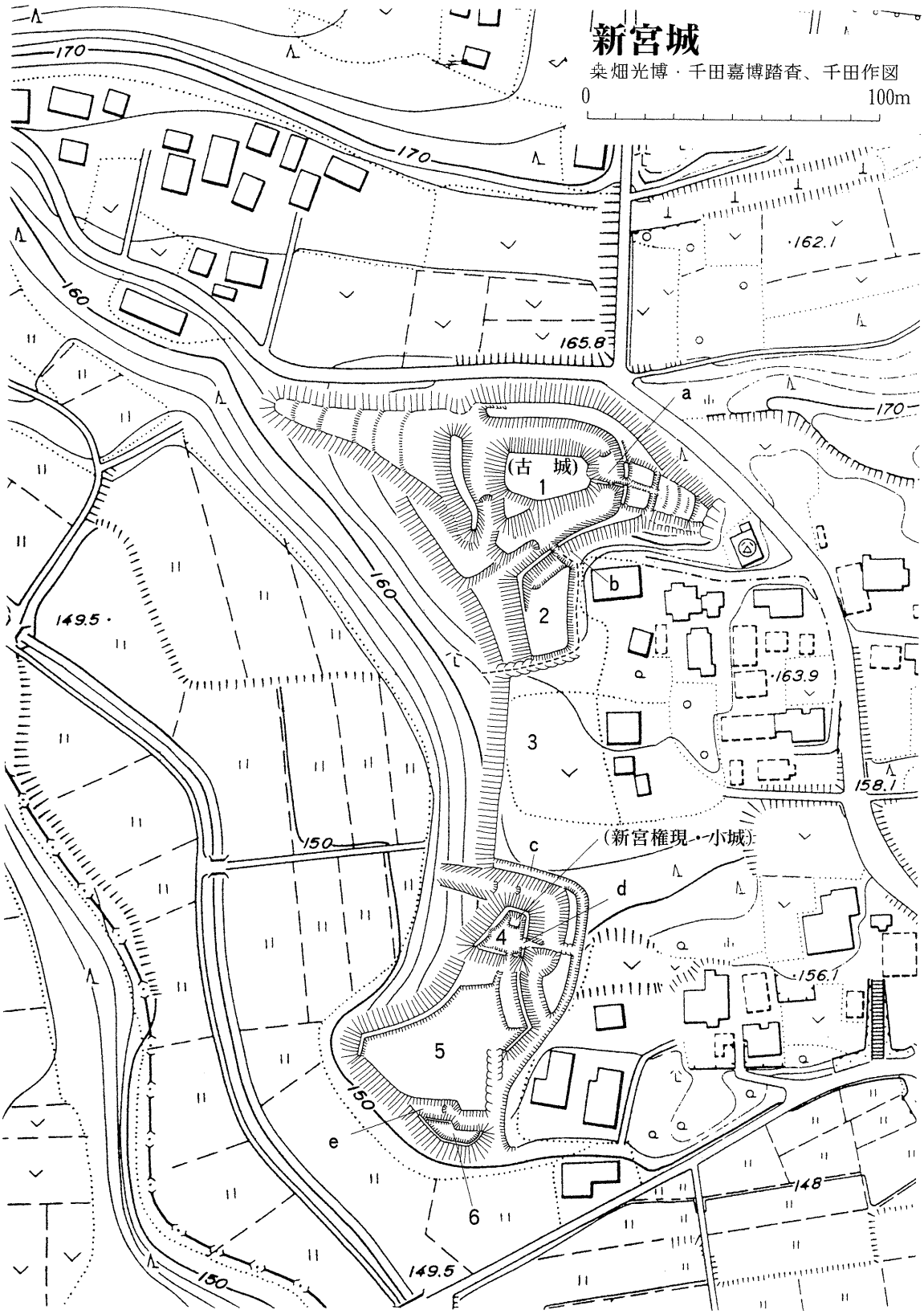


図14　新宮城跡平面図

5．梅北城跡（うめきたじょう）

梅北城は、都城市梅北城下・城・曲橋にかけてあり、梅北川に臨む崖を利用して、標高168ｍの台地の西南に立地している。万寿３年（1026）に太宰大監平季基が梅北城を創築したという伝承がある。いずれにせよ、現在、地表面から観察することができる梅北城とは大きく異なつたものであつたろう。その後、天文７年（1538）には島津忠相に攻められ落城したことがわかる。

梅北城は、飛永城、上村（井）城、中之城（中城）、新城という４つの主要な曲輪から構成されていた（『庄内地理志』巻93）。このうち梅北川に向かい南西に大きく張り出した尾根上に立地していた上村城は、尾根が大きく削平されてしまい、遺構が失われている。上村城の所在位置は図中①で、もとの標高は161ｍを測つた。新城③周辺の168ｍと比べてやや低かつたことになる。

中之城②は、全体がよく遺存している。また新城③は、東側の土塁が崩され、堀が埋め立てられている。しかし、埋め立てられた土塁と堀の痕跡を、現状でたどることは可能で、新城③の規模を知ることができる。④の部分は、それぞれの城（曲輪）に見下ろされた山麓部で、堀に囲まれていた痕跡を現況の田に確認することができる。明らかに城域としてよい。飛永城はこの④か、あるいは東側の⑤と考えられる。

梅北城の構造は、一見、四角く整えられた新城③を基本としたように見えるが、そうではない。伝承される城（曲輪）の名称と立地から考えて、まず、梅北川に接し、比高差のやや少ない張り出した尾根に上村城が築かれ、また台地の麓に飛永城が成立した。ついで北側背後の台地端をわずかに城に取り込んで城域を拡張し（中之城）、さらに台地上に広い城域を確保して城域全体を整え直した（新城）、という３つの段階を経て、できあがつたと推測できる。

破壊前の地籍図によれば、上村城と飛永城はほぼ同じ大きさであつた。中之城②は、北側に２ｍの土塁を備え、新城③側への防御に留意していた。中之城②への出入り口は２ヵ所あり、ひとつは北西隅を北側の堀から登る堀底道、もうひとつは東側からスロープを登って窪地状の出入り口に到達したものである。２ヵ所とも、もちろん城門を備えていたことはいうまでもない。中之城②は、立地や遺構から見て、梅北城の中で、もっとも防御機能が高く、特に要害としての機能を発揮した曲輪と評価できる。

新城③への出入り口は、現在も使われている南側からの道であつた可能性が高い。台地つづきの新城東側に対して、出入り口が開けられていたか否かは、現地調査の時点では確認できなかつた。

この新城③は、北東部がもっとも高く広い段になっている。そして西から南西にかけて一段低い。つまり新城③は、東西200ｍ×南北100ｍの長方形の削平地と、南東の50ｍ四方の削平地が連結して成立した、ひじょうに大きな曲輪であつた。

城域の縁辺部に城内で最大の面積をもつ曲輪が配置された構造は、南九州の中世城郭によく見られるものである。その役割などについては必ずしも良好な発掘成果があげられていないが、基本的に中・下級家臣の集住地として機能したと考えられる。梅北城の場合、新城③の築かれた台地縁部を確保することは、中之城②以下の曲輪を防御するために、きわめて重要であった。さらに多くの軍勢を収容し、危機的な状況下で臨時に地域住民が避難し得る空間は、新城③以外の城内には見あたらず、ここは惣構え的な役割ももつたことが推測できる。

新城③に残る土塁は、土塁側面の傾斜角度が急で、上面も幅広によく整えられたものである。北側では土塁の高さ２ｍ、南東張り出し部の東側土塁では１.５ｍである。また堀も同様に規模が大きく、かつシャープな立ち上がりで、主郭北側では上端幅23m、深さ20ｍを測る。こうした土塁と堀の状況は、梅北城の最終的な改修が、戦国末期～織豊期のものであることを示している。歴史的な背景から考えると、梅北城の現状遺構の整備は、慶長４年（1599）の庄内合戦を契機にしたものであった可能性が高い。（千田嘉博）

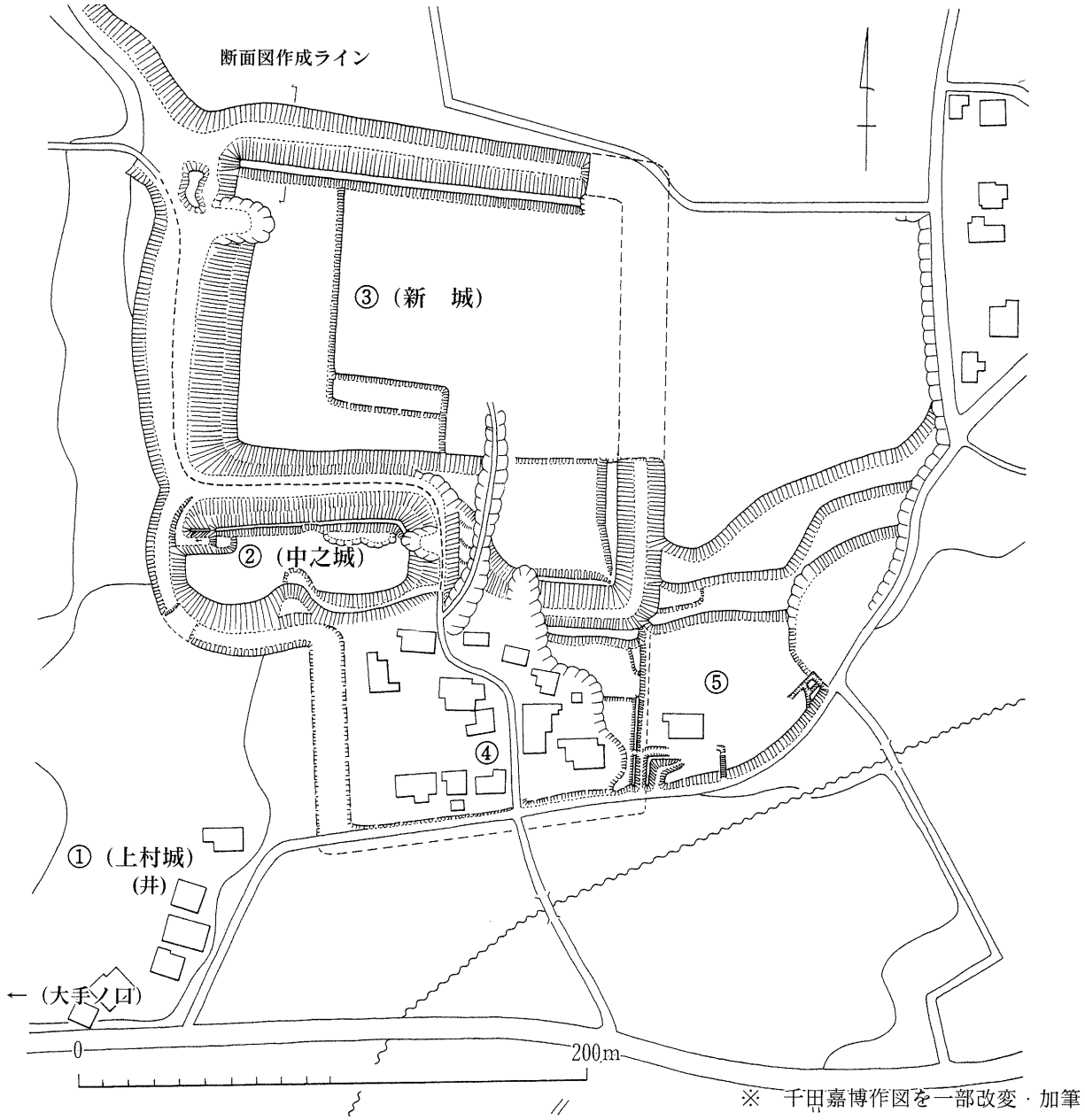


図15　梅北城跡平面図

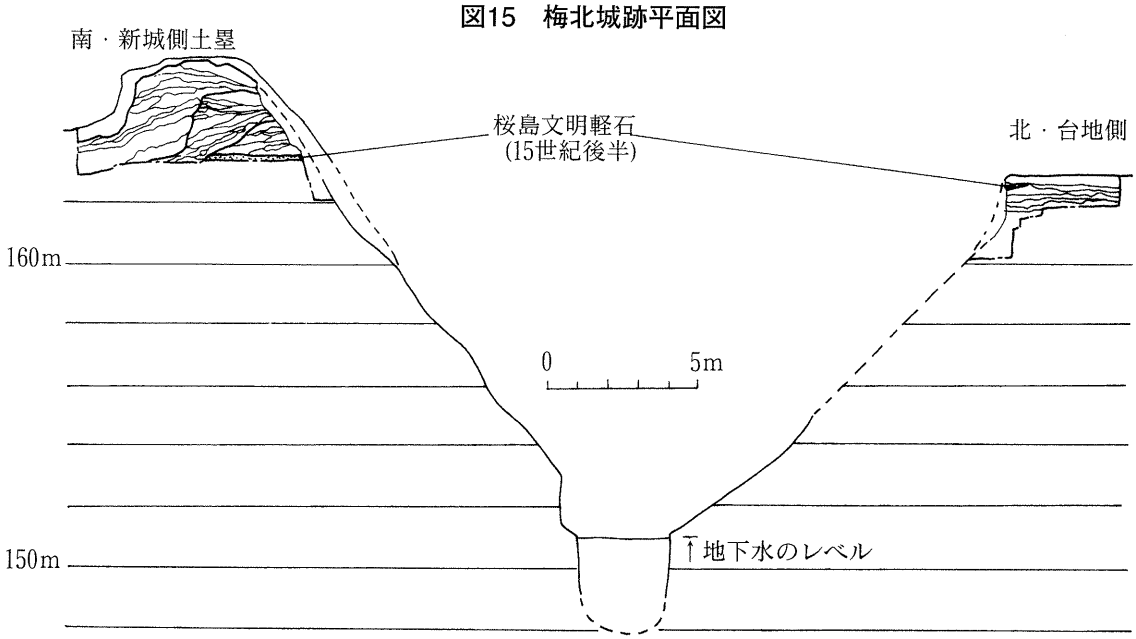


図16　新城曲輪北側土塁・空堀の断面図

6．池平城跡（いけひらじょう）

都城市安久町にある比高20mのなだらかな丘陵先端に池平城は立地する。現在、南側には池平池が広がる。廃城後大きな改変を受けることなく、遺構の保存は完全な状態である。池平城のプランは比較的単純で、丘陵頂部を東側から大きく切り込み、方形を基調とした曲輪を形成している。

堀に囲まれた曲輪は、南西部分がもっとも高く、わずかに内部は傾斜するが、おおむね削平は良好である。東側には一段低く帯曲輪がめぐる。このふたつの曲輪とも、堀はきわめて大規模なものであったにも関わらず、縁部には土塁は認められない。この二段の曲輪によってつくられた池平城の中心部に入るには、何らかの方法で堀を越えなくてはならない。

しかし明確な出入り口の痕跡と判断される部分は見あたらず、詳細は不明である。いずれにせよ東側の帯曲輪に、まず入ったと考えられるから、帯曲輪北端の堀の対岸側も１段下がっている部分、あるいは帯曲輪南東部下の三角形の小曲輪が出入り口に関わった可能性が高いと推測できる。

堀はもっとも大きな部分で上端幅約20mを測り、堀斜面の切岸も急傾斜を保っている。堀対岸上の西側には帯状に１段高くなった部分がある。この段に接して堀と直交する小土塁も見られるが、機能は明らかでない。あるいは後世の造作かもしれない。これら遺構の西側はゆるやかに傾斜しており、明確な曲輪化は行われていない。

城郭中心部の北側には、東西方向に大きな段差を伴った切岸があり、その先は４つの削平段がつづく。北端部分の削平は新しいものである。北端をのぞいた小削平地では、近世後半から近代にかけての墓石がいくつか観察され、共同墓地として利用されていたことがわかる。（千田嘉博）

7．六ケ城跡（ろっかじょう）

都城市安久町にある比高120mの尾根上に六ケ城は立地する。安久集落からつづく林道によってわずかに城域北端部が削られているが、遺構はほぼ完全に遺存している。当城のように本格的な山城形態は南九州ではひじょうにまれである。『庄内地理誌』によれば、文明の乱の際に薩摩の軍勢が陣を構えたとする。

主郭は標高305mの高さにあり、北西塁線の中央に堀底道を介した出入り口を開く。主郭背後はもともと鞍部になっており、６m程の比高差をもつ。この斜面は、さらに加工を加えて、急な切岸に仕立てている。主郭の出入り口を出た通路は主郭下の帯曲輪につづく。この帯曲輪が北と西に展開した曲輪群を有機的につないでいる。西の尾根の曲輪は、すぐに堀切りによって遮断される。堀切りの北脇の城内側には土塁が添えられ、また南側は堀切りの先を竪堀とすることで、斜面から主郭方向への回り込みを防いでいる。

堀切りの北側は、堀底道になっており、帯曲輪を経由して谷筋への城道が伸びている。正応寺集落に連絡する道で、この城の大手道に相当したものと考えられる。西の尾根に設けられた堀切りは、尾根の傾斜転換点ではなく、まだ尾根上の等高部分を残した位置に設定されている。堀切りより西側の部分は、特に西側の切岸が充分整えられておらず、堀切り以東の部分より格下の空間として意識されていたことがわかる。この尾根はさらに南西に伸びて、ここにも曲輪を形成している可能性があるが、踏査できなかった。

主郭から北に展開した曲輪群は、主な尾根上に４段の曲輪を配し、その西側斜面の通路状の帯曲輪で相互に連絡した。この通路は、所々流水によって掘り窪んでしまっている。そのため部分的に外枡形のような複雑な出入り口のように見えるところがあるが、本来の形態ではない。城域北西端の帯曲輪は北に向かって傾斜しており、外側に土塁を備える。先端は失われているが、おそらく城の北の堀切りにつながっていたのであろう。六ケ城は15世紀の臨時の陣城の遺構として評価してよく、きわめて貴重である。（千田嘉博）

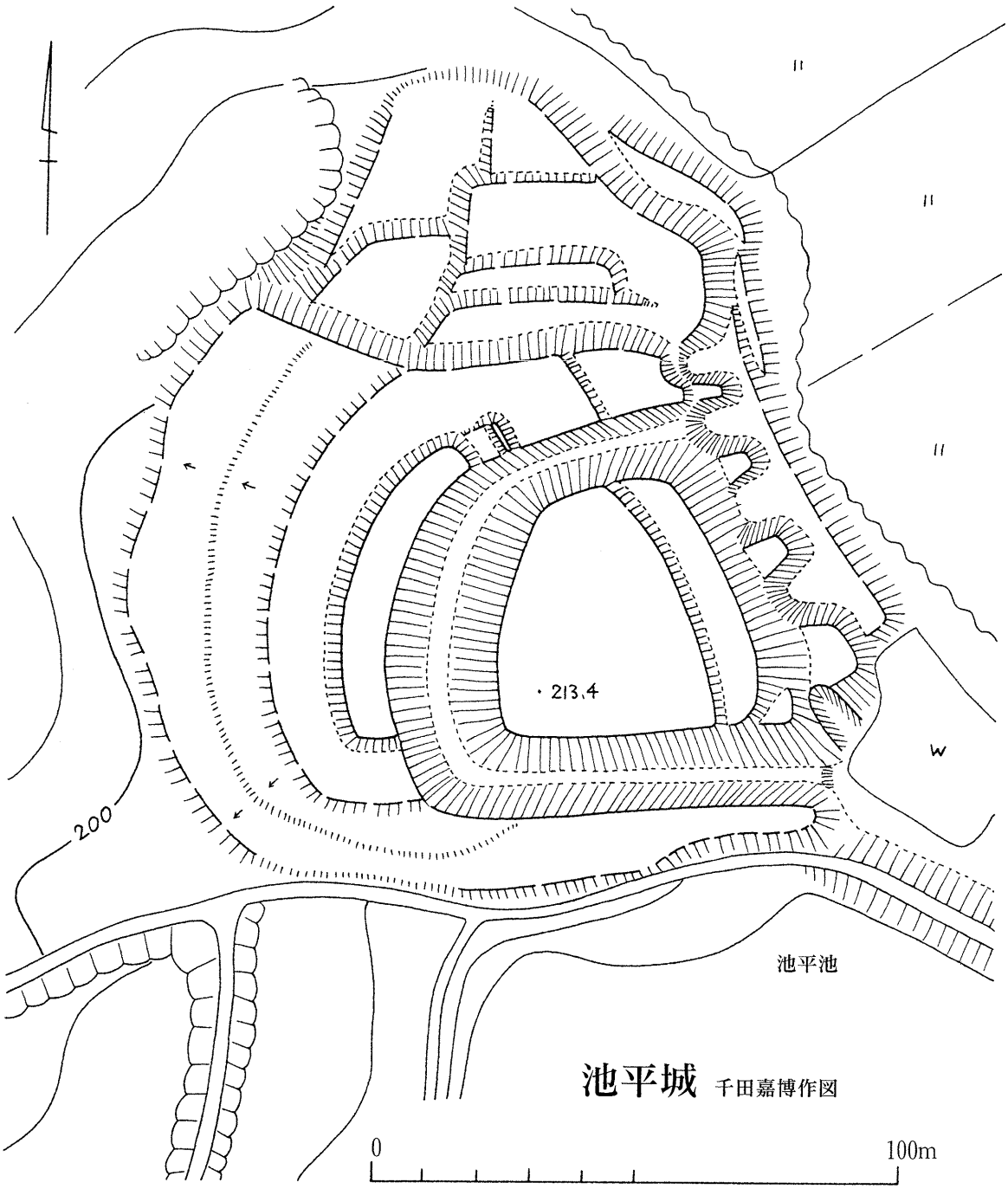


図17　池平城跡平面図

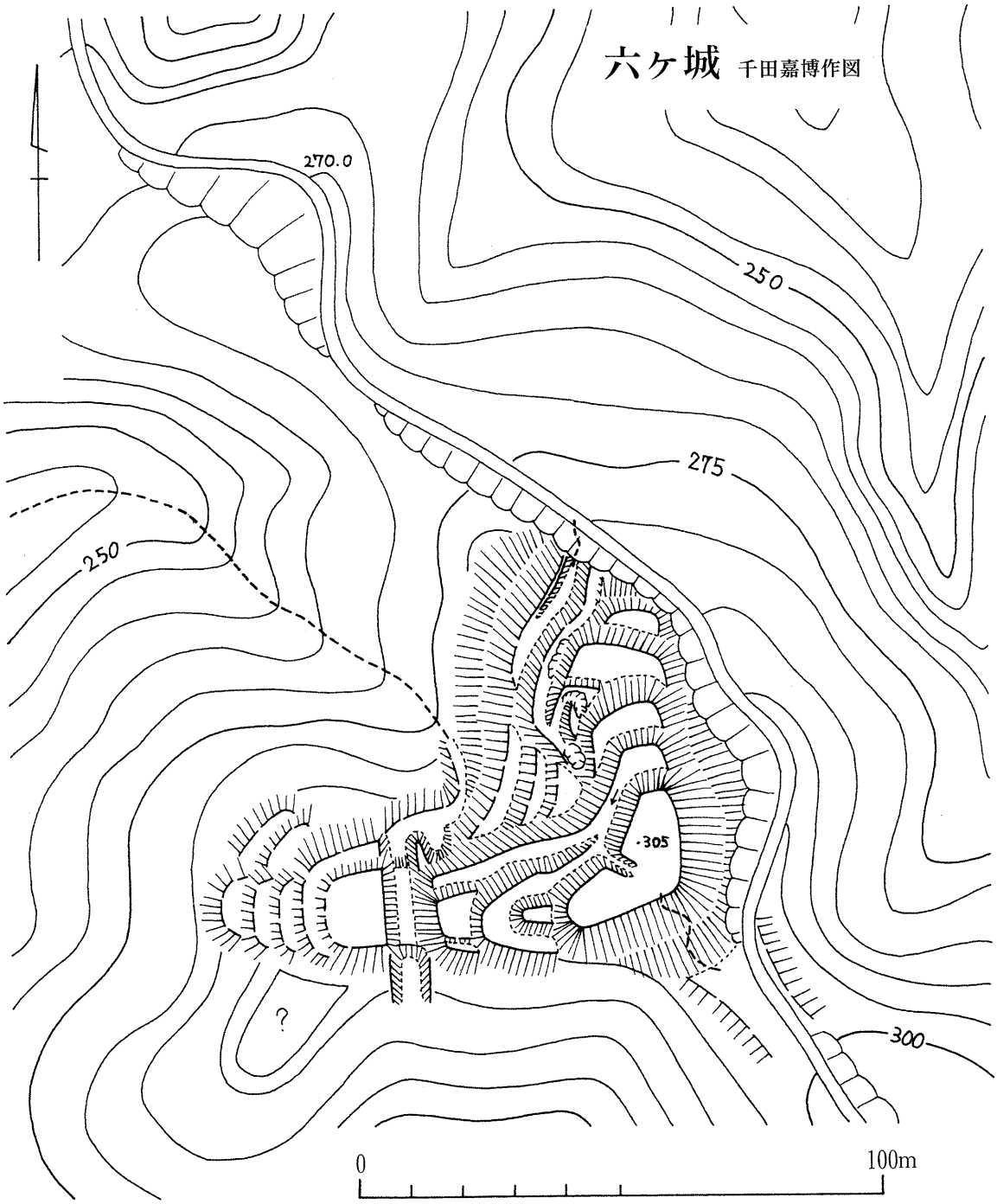


図18　六ヶ城跡平面図

8. 安永城跡（やすながじょう）※

1）安永城の占地

都城盆地を流れる大河大淀川は、古来日向の大動脈であった。この大淀川に流れ込む大きな支流の一つが庄内川で、この川のほとりの台地縁に安永城がある。そこは大淀川と庄内川の合流点から庄内川を約５キロさかのぼった所で、支流の小田川の合流点に位置している。現在は庄内川より安永城は約１キロほど離れているが、かつては、この半分ほどの距離で、庄内川の水上交通を十分把握できるものであったろう。

都城盆地の城は、この大淀川を徹底的に抑えるように築かれている。本城ともいうべき都之城は都城盆地の中央で、大淀川、梅北川、荻原川の合流地点を抑え、野々美谷城、志和池城と流域を抑えていく。一方安永城は庄内川、山田城は山田川(丸谷川と合流)など有力な支流を抑えている。このように、都之城を中心として、大淀川とその支流に網の目のように城を配置することで在地支配を貫徹していった様子がうかがえる。

安永城の占地は、諏訪原台地の先端にある。この諏訪原台地は、遠く高千穂峰から派生する台地の末端にあたる。庄内川と小田川など小河川によってけずられ、舌状台地となり要害地形をなしている。この舌状台地を巧みに堀によって分割し、防御を固めたのが安永城である。

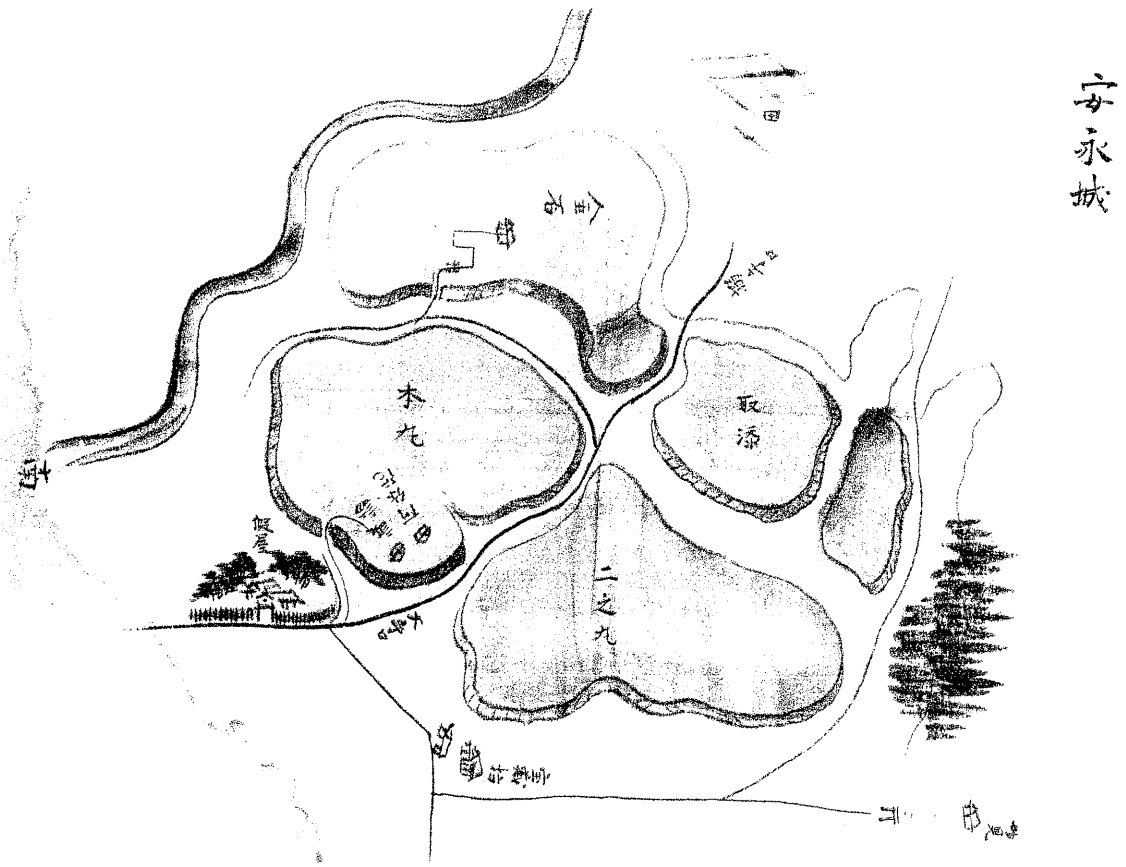


図19　安永城古絵図（都城島津家蔵）

2）安永城の曲輪

安永城は、大きく四つの曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・によって構成されている。Ⅰは本来この城のある台地の先端にあたり、最も要害の地を占めているため、当然主郭となる曲輪である。伝承も全てここを「本丸」「内城」としている。例えば都城島津家蔵の安永城絵図[1](以下「絵図」とする)では、「本丸」の注記があり、「庄内地理志[2]」所収図ではやはり「本丸」とし、小さく「内城」と注記する。もちろん、「本丸」の呼称は、この地域での使用は豊臣大名にくりこまれた天正15年以降と考えられるので、この曲輪は本来「内城(ないじょう)」というのが正しいと考えられる。

この曲輪Ⅰは、南半がやや高くなり、現在児童公園になっている。この公園化でかなり曲輪面が削平されたため、表面観察では遺構は既にわからなくなっている。曲輪の周囲は低い土堤が巻いているが、これは土塁ではなく、公園化の時に作られたものである。虎口と考えられるものは2か所ある。1は、今でも東から入る主要道になっている。この道が本来のものかどうかは比較的わかりにくい。道自体新しく整えられている上、一部ルート変更をしているからである。しかし、曲輪に入るあたりが竪堀とセットになっていること、5と6の腰曲輪とルートが連動していることなどから、本来の道であると考えられる。「絵図」には、諏訪神社などへ向かうU字形の道がかいてある。これがこのルートに相当しよう。仮屋からのルートなので、かなり重要なものであったろう。このルートの方面は、やや地形がゆるかったためか、何重にも腰曲輪を重ねて防御を固めている。2は南州神社からの道で、現在は神社の階段そして堀7へ降りるようになっている。これらはいずれも新しいものであり、本来は堀底道の8を通り、曲輪の南面から西面を大きく回り西へぬけるルートであろう。このルートは堀底道で、西側がかなり大きな土塁となっている。土塁上からもルートを抑えるように人が歩けるようになっている。なお堀7は、この2の虎口ルートの腰曲輪から東へ移動するのを防ごうとして入れたものであろう。

曲輪Ⅰの曲輪面には、東方に大きなマウンド3があるが、1の前方にあるマウンドとともに新しいものであり、城の遺構ではない。

曲輪Ⅰのほぼ中央に北から入る自動車道路がある。もちろんこの道路は全く新しいものであるが、「絵図」によればほぼこの道路の入口あたりに、虎口かどうかわからないが、少なくとも江戸期には登り口があったらしい。

曲輪Ⅰの北の半分は、低くなりながら西北方向へ続く。この曲輪のちょうどまん中に堀底道10が入っている。この堀底道は途中自動車道路で破壊されているため、どのように曲輪Ⅰの南へ入っていったかわからない。しかし、この堀底道と同じ方向にやや低いくぼみ4がある。もしかしたら、ここが枡形の名ごりかもしれない。

堀底道10の両側は、いくつかの曲輪がある。西の方の先端11は、櫓台の役割をはたしている。東は大きく二段11に分かれ、先端の曲輪には東面のみ土塁がある。こうした両側の曲輪群にはさまれた堀底道10は、かなり防御が強いといえる。また堀も比較的大きく広い。これらの事から考えて、この曲輪Ⅰへ入る大手口は、このルートであろう。この堀底道は出口に近い所で二股に分岐するが、両方とも途中から壊されているため、どちらが本来のものかわからない。なお、この曲輪Ⅰの東北にある庄内小学校の地がかつての仮屋(居館)の地であるが、既に遺構は存在しない。

この曲輪Ⅰと曲輪Ⅱは堀で断ち切られている。現在はかなり巨大な堀であるが、これは大正の初年の庄内小の運動場の造成のための流し工事により、堀の壁面が崩れこんでいるためである。しかし、この流し工事がなくとも、かなりの規模の堀であったことはまちがいない。

曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰの北の尾根続きにあり、「絵図」によれば、「二之丸」とされている。少なくとも江戸期には二番目の曲輪と意識されていたのであろう。本来の曲輪名は不明である。「庄内地理志」の文中

に出てくる「今城」「新城」のどちらかが本来の曲輪名かもしれない。「新城」と「今城」のどちらも「新しい城（曲輪）」という意味であるので、「本丸」に新しく付設された曲輪なのであろう。

曲輪Ⅱは現在農地となっているが、遺構はまだ地中に残存していると思われる。曲輪の周囲は土堤になっているが、これは根切りの土堤であろう。

この曲輪Ⅱは、現在12の道から入る。自動車が入る道なのでかなり拡幅されている。古くからの道なのであるが、もともとのルートであったかどうかはわからない。ここ以外には、ルートになりそうなところは、13と14がある。しかし、13はルートになりそうな地形であるが、現在はかんじんのルートは見つからない。14は腰曲輪を断ち切る竪堀である。下の道から登ってこれるのでルートとなる可能性はあるが、ここも腰曲輪と曲輪Ⅱへ入る安定したルートと虎口はない。以上のように、この曲輪Ⅱへのルートは不明であるが、全体の地形を考えると、やはり15の腰曲輪へあがり、12の位置のすでに失われた虎口から入るのが素直かもしれない。これらがいずれも道路の拡幅により破壊されたと考えることもできる。なお「絵図」にはルートは描かれていない。

この曲輪Ⅱは、東面が敵正面にあたるため腰曲輪15が北へ回りこみ、ほぼ曲輪を半周している。この腰曲輪で防御を固めていたと思われる。

曲輪Ⅱの尾根続きは、巨大な堀切16で切られている。堀底は自動車道路となりかなり掘り下げられているが、堀の上部はまだかつてのおもかげを残している。

Ⅲは曲輪Ⅱの尾根続きであるが、曲輪の可能性がある。台地との接点は帯状の浅いくぼ地17があるので、ここが堀切であったと考えることもできる。「絵図」には「取添」の北に細長い無名の曲輪を描くが、形はかなりこのⅢと似ているので、これを描いたものと考えられる。

曲輪Ⅳは曲輪Ⅰの西にあり「金石」と呼ばれている曲輪である。ここについては発掘によりさまざまな成果があったが、それは本文にゆずることにしたい。なお、18の位置にルートの名ごりがあるが、これは途中から壁面が崩壊したため、ルートはなくなっている。

この曲輪Ⅳと曲輪Ⅰの間は、巨大な谷となっている。これが本来のものであったかどうかだが、この谷は曲輪Ⅱと曲輪Ⅴの間につづき、Ⅲの西側までいく。これからすると、自然の谷であった可能性が強い。もともとこの城は尾根が分岐する先端の二つを独立させ、それぞれ「金石」「内城」とし、セットにして城としたものだったのであろう。

曲輪Ⅳとその対岸の一部を空堀19で切断している。ここも流し工事で広げられたものであろうが、もともと大きな空堀であったと思われる。曲輪Ⅳの対岸は、全部を曲輪にすると城域が広くなると考えたのか、対岸のほぼ中央にＬ字形に堀20を入れる。かなり大規模な堀で、この安永城の本来の堀の大きさがよくわかる。ここは「絵図」によれば、「取添」とされているところである。「取添」の曲輪名は都城にもあり、この安永城と同様にいずれも城に接する台地の内、城に面する部分を区切って新たに曲輪にしている。防御の最前線になる曲輪でかつ新しく取り立てたものを「取添」といっているようである。この曲輪Ⅴの北面に土塁21がある。現在はここしかないが、ここが台地との接点で最前線にあたるため、本来台地沿いには土塁はめぐっていたと考えられる。

曲輪Ⅴの南面は、ゆるい斜面であったのか、三段の腰曲輪で処理されている。22は虎口で下からルートにつながる。ただし、この下はかなり地形がこわされ、ルートは追えない。最下段の腰曲輪には、やはり堀沿いに土塁23がある。

曲輪の北面には、堀から曲輪へ入るルート24がある。しかし、このルートは最前線の堀から、直接曲輪に入ることになるので、本来はなかったものであろう。

「絵図」によれば、この曲輪ⅤとⅣの間にルートがあり、そのまま台地にぬける。このルートは「搦手

口」とされる。現在はこの道はない。

Ⅵは空堀25と曲輪Ⅱを区切る空堀26によってできた曲輪である。はたして独立したものなのか、曲輪Ⅴの一部であったのか、空堀が途中道路により破壊されているためわからない。このあたりは「絵図」にも描かれていないようである。また、空堀26の北端が北西にややくいこんでいるが、これが曲輪Ⅴの空堀20と結びつくのか不明である。ここはゆるい谷筋になっているので、屋敷地として使われていたのかもしれない。なお、Ⅵの曲輪上は、かなりけずられており遺構面は既に失われていると思われる。なお、土塁状の27は、土地のけずり残しである。

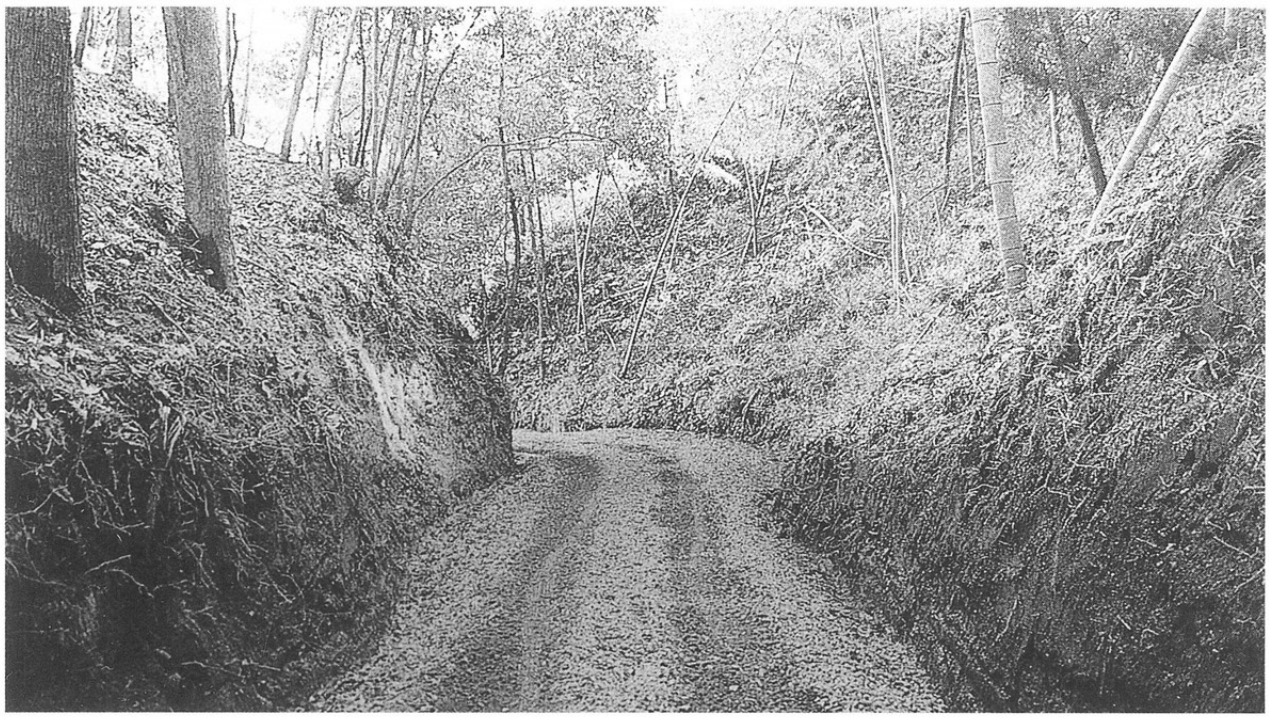


写真1　曲輪ⅡとⅢを区切る巨大な堀切16

3）安永城の遠構

安永城が、先ほども述べたように諏訪原台地の先端にあるが、この台地には多くの谷が入りこんで複雑な地形をみせる。安永城から北へ約650ｍほどいくと、台地の両側の谷が大きく接近し、ネック部を作る。このネック部を利用して、東西一直線に堀切を入れている。ここは昭和49年の区画整理事業やその後の埋めたてなどにより極めて浅くなっている。しかし、それでも歴然と痕跡を残していて、特に中央をぬける道路の西側は１ｍ以上の深さを保っている。昭和49年[3]以前は、堀底まで４～５ｍあったという。土塁は現在はないが、内側にあたる南側が若干高くなっていたとのことなので土塁はあったであろう。

この堀切は現在「外堀（とぼり）」と呼ばれていて、この堀より内側を「内城」と呼んでいる。「内城」は本丸の名称なので城の中心部分の名が城内の代名詞になったものであろう。この堀切は江戸時代から知られていて、「庄内軍記[4]」所収の図(第５図)には、「堀切」と注記され、鳥瞰図に堀切と覚しき線が描かれている。

さて、この堀切の性格を考えてみよう。城自体は諏訪原台地の先端にあり、それで完結しているのであるが、なぜ台地を区切る遠構の堀が必要であったのであろうか。これには二つの可能性が考えられる。一つは、城下集落を設定するための総構とする考え方である。台地上はかなり平坦で、容易に城下集落を構成できると考えられる。しかし、現在の庄内の町は、庄内川の河岸段丘にのって構成されており、河川交通との関連からも台地上に城下集落を設定することは極めて不利であると考えられる。従ってこの堀切は、

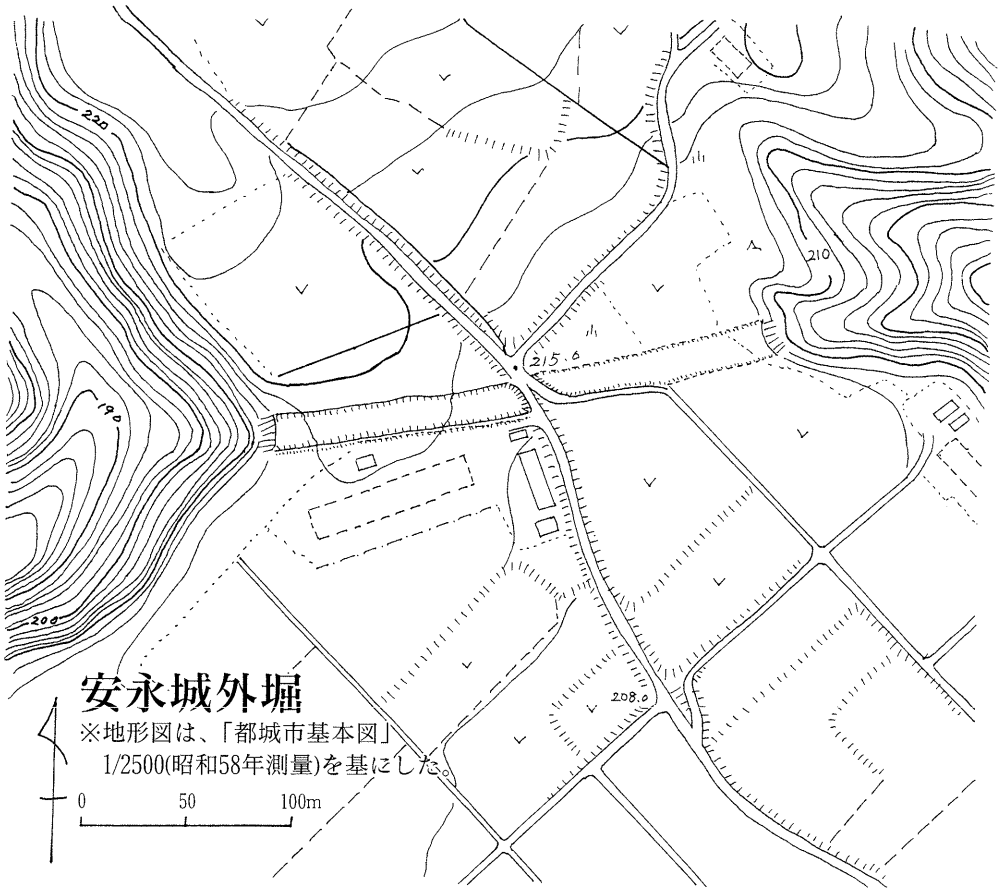


図20　安永城外堀平面図

城下町設定の総構ではないであろう。

二つ目の可能性として、庄内の乱に関する防御の堀との考え方である。庄内の乱は周知のように島津家の内乱であるが、約１年間も続き中央権力の介入も招くほどの大乱であった。この乱で安永城には伊集院五兵衛、そして有名な軍師の白石永仙らがたてこもり、都之城防備に重要な働きをしたと伝えられている。

安永城の立地をもう一度考えてみると、諏訪原台地の西面は裾に小田川が流れていて、南面の台地先端を流れる庄内川とともにかなりの要害をなしている。これに加うるに、東の自然の谷を考えると、確かにネック部をふさげば全体が大きな要害となるのである。これに目をつけてネックを遮断する堀切、即ち遠構をいれたと考えるのが、最も合理的であろう。

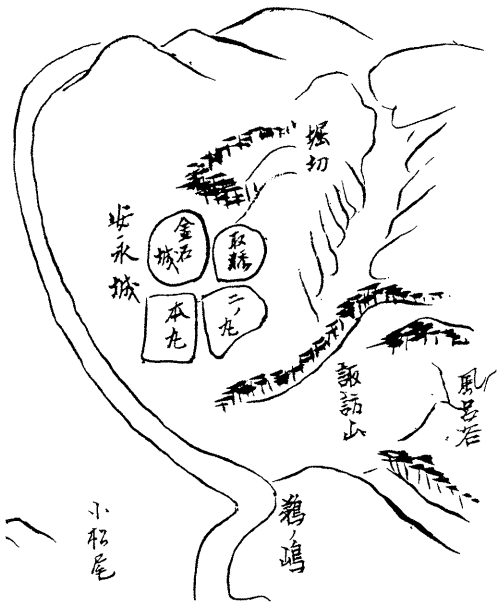


図21 安永城周辺古絵図(「庄内軍記」所収)

以上のように、この堀切は安永城の遠構であり、その目的は庄内の乱（慶長５年）にあたって築かれたものと考えられる。なお、この堀の内側の台地は、必ずしも全てを城郭として使っていたものではなく、戦時の避難住民の居住空間、また兵站基地、食糧自給のための畑などに使われていたと思われる。

このような形の台地上の遠構は、全国的に残存するものは少ない。それぞれ機能は違うにしろ代表例をあげてみると、静岡県にある武田氏・徳川氏の諏訪原城の遠構は既に失われており、また山梨県のやはり

武田氏の新府城の遠構も現在破壊が進み保存が問題となっている。類例が極めて少なく、特に南九州では今のところ唯一の一例[5]と考えられる貴重な遺構である。

4）安永城の構造の意味

前章のように安永城は大きく4つの曲輪に分かれている。地形もシラス台地であり、いわゆる南九州型の城郭で群郭式[6]といわれるものの典型例という風に考えられがちである。この南九州型城郭、群郭式の城郭の特徴は、相対的に主郭が不分明で、独立的な大きな曲輪群で構成されているとされる。しかしこの安永城の場合は、大きく見れば、尾根を順次切っているのがわかる。そして主郭は、その尾根の先端に置き、その主郭を守護するように、他の曲輪を重ねているのである。本州の城とは一見異質ではあるが、防御構想は全く同じである。主郭も明瞭に判断できる。筆者の調査[7]によれば、この群郭式の城郭の主郭が不分明な城の方が、むしろ少ないともいえるのである。南九州の城の縄張の調査が今の所大きな台地の城に片寄っていることを考えると、より広範な調査により、この南九州型、群郭式といわれる城の特徴そしてその成立を改めて考え直す必要があると思われる。

5）安永城の価値

安永城は流し工事や土取り、道路の開設により、かなり破壊されてはいたが、予想以上に遺構は残存している。大柄な曲輪取りをする南九州型、群郭式の城であり、まだ城郭研究上、謎の多いこのタイプを究明する上で貴重な例となろう。また金石城の発掘により、この城の一つの曲輪の使い方がある程度推定できるようになった。他の大型の三つの曲輪との使い方がどう分かれていたのか、これも今後の大きな課題となると思われる。

これに加えて、安永城の大きな価値は、台地上の遠構の存在であろう。日本の中世城郭でも類例の少ない遺構である。幸い、かなり埋められているとはいえ、今だその跡は明確にたどれる。早急に史跡の指定、保存の方策をたてるべきであろう。筆者は、この遺構を庄内の乱に関係するものと考えたが、これ以外の可能性も含めてこの堀の意味を解明することは日本城郭史を考える意味でも極めて重要であろう。

安永城は今回の金石城の破壊により、主要な曲輪の一つを失った。しかし、それでもなお比較的良好に保存されている主要な三つの曲輪(Ⅲを曲輪とすれば四つ)が残っている。庄内の乱に関する都城十二砦と称される城郭群の内、山田城、野々美谷城、志和池城など既にその遺構のほとんどをとどめない。その中で曲輪一つを失ったとはいえ、安永城は今だその遺構をとどめているのである。しかも庄内の乱は近世初頭の南九州の最大の内乱であるだけでなく、実質島津家が近世大名として脱皮するための戦いであった。その意味でこの安永城は、この都城地域の近世化のモニュメントともいえるわけである。こうした歴史的意義を考えると、早急に史跡に指定し、保存の方策をとる必要があるのではなかろうか。

6）安永城の保存と整備

現在の安永城は、その「本丸」が公園として活用されているが、この公園化のためにかなり曲輪面が削平されたらしい。それでも遺構はまだかなり地中に残存していると考えられるので、ここはなるべくこのまま保存するべきであろう。城跡は文化財であるということを考え、地下遺構を破壊するような建築物は厳に避けるべきである。また、城内へ入る道路の西南部は堀を初めとしてルートもよく残っている。しかし、ここは一般公開が難しいので、ここはこのまま手をつけないのが望ましい。

この曲輪Ⅰは、「本丸」と称されており、安永城の中心をなしている。しかし、城跡とわかるものは簡単な看板以外は一切ない。そのため市民も城跡とは知っているものの単に何もない所と考えているようで

ある。そこでここには永久保存の腐食しない材質でもって曲輪配置を立体模型にして展示したらどうであろうか。これを見ることにより、見なれた山が安永城の一部であることがわかり、かつ町と城との関係も一目瞭然となり、城への愛着もわくと思われる。また、ここに新たに腐食しない材質でこの城の縄張と歴史を簡単にかつ興味深く解説する説明板も必要であろう。

曲輪Ⅱは現在畑となっている。ここもこのまま保存とし、学術的に必要な場合のみ調査することとする。

曲輪Ⅲは、まだ曲輪と判断できない。既に民家も建っていてかなり破壊されているが、尾根続きのくぼみは堀の可能性もあるので、いずれは発掘し、城域の確定をする必要があろう。

曲輪Ⅴは、この安永城では最も保存されているものである。周囲の堀も見事に残っている。曲輪内は山林でほぼ完全に残されている。ここはとりあえず史跡指定をし、現状のまま保存することが望ましい。

その他、Ⅵは曲輪内は既にかなり削平されているが、北面の堀はよく残っている。ここも史跡指定が望ましい。

遠構の堀は、既に埋められているが、ここは早急に史跡指定にするとともに、これ以上の破壊が進まないようにするべきである。いずれ、この堀の掘り起こしをして、復元も考えるべきだと思われる。

以上のような各曲輪と遠構の堀には、登り口など一番目立つ所に、史跡の説明板を立てるべきであろう。その中では、安永城の全体の曲輪配置と、該当の曲輪の位置づけ、そして安永城の歴史を簡明に紹介し、中世史跡の重要性を強調したい。何といっても、城郭の保存には市民の理解が必要である。市民の理解のない史跡の保存はないことを考え、気長に中世城郭の特徴や郷土の城郭での先人の活躍などをＰＲしていき、保存の方向へ導いていくことが大切である。中世城郭を目に見える形での天守閣などの安易な復元ではなく、市民の森、史跡の森、生涯学習の場、小・中学生の郷土史研究の場として活用していくことが、これからの大きな目標と考えられる。

(八巻孝夫)

註

(1) この絵図は、都城島津家に伝来のものであるが、「都之城の城郭絵図」に比べるとはるかに簡単に描かれている。しかし、この絵図の作製者は現地を歩き図化したと見られ、簡単ながら曲輪の形や方向はほぼ現状と合う。またルートの表示も一部ながら図示してあり、今後の安永城を考える上でも貴重である。なお、この安永城以外の図も同様の手法で多数存在するらしい。現在は公開されていないが、おそらく庄内の12砦は全て図化されているのであろう。

(2) 江戸時代の中ごろの地理書で荒川儀方の作とされる。庄内の城郭図もかなり収録されており貴重。安永城は「絵図」とは違う系統の図である。かなりデフォルメされ、曲輪の位置など正確ではないが、城下の様子など違う情報も含まれている。

(3) 地元の坂元貞雄氏(昭和8年12月生)談。

(4) 『庄内軍記』は、庄内の乱を題材にした軍記物で、都城島津家所蔵本の他異本もある。都城本は延宝年間(1673～81)の作とされる。刊本は孔版で都城図書館発行(昭和50年)のものがある。

(5) 最近同じ庄内の山田城に「遠堀」と推定できる遺構が残存するのが判明している。(宮崎県教委・北郷泰道調査)。台地縁の主郭グループを大きくリング状の堀で囲い込むもので、同じ機能の物と考えてよいかもしれない。'92年秋に『宮崎考古』第12号に「北郷氏における中世城郭とその社会」(北郷泰道)で発表された。

(6) 南九州型城郭は、村田修三氏の仮称(『中世城郭事典』第三巻「城の分布」)で、群郭式城郭は城郭研究者間でこの

タイプを古くから言っている。とりあえず仮称として使っておく。

(7) 都之城、佐土原城、宮崎城などの主郭は明らかである。

※文献36を一部訂正の上再録した。

安永城

宮崎県都城市庄内町

調査日／1991年11月30日～12月２日

作　図／八巻孝夫

※都城市基本図１/2500（昭和58年測量）を拡大して使用した。

図22　安永城跡平面図

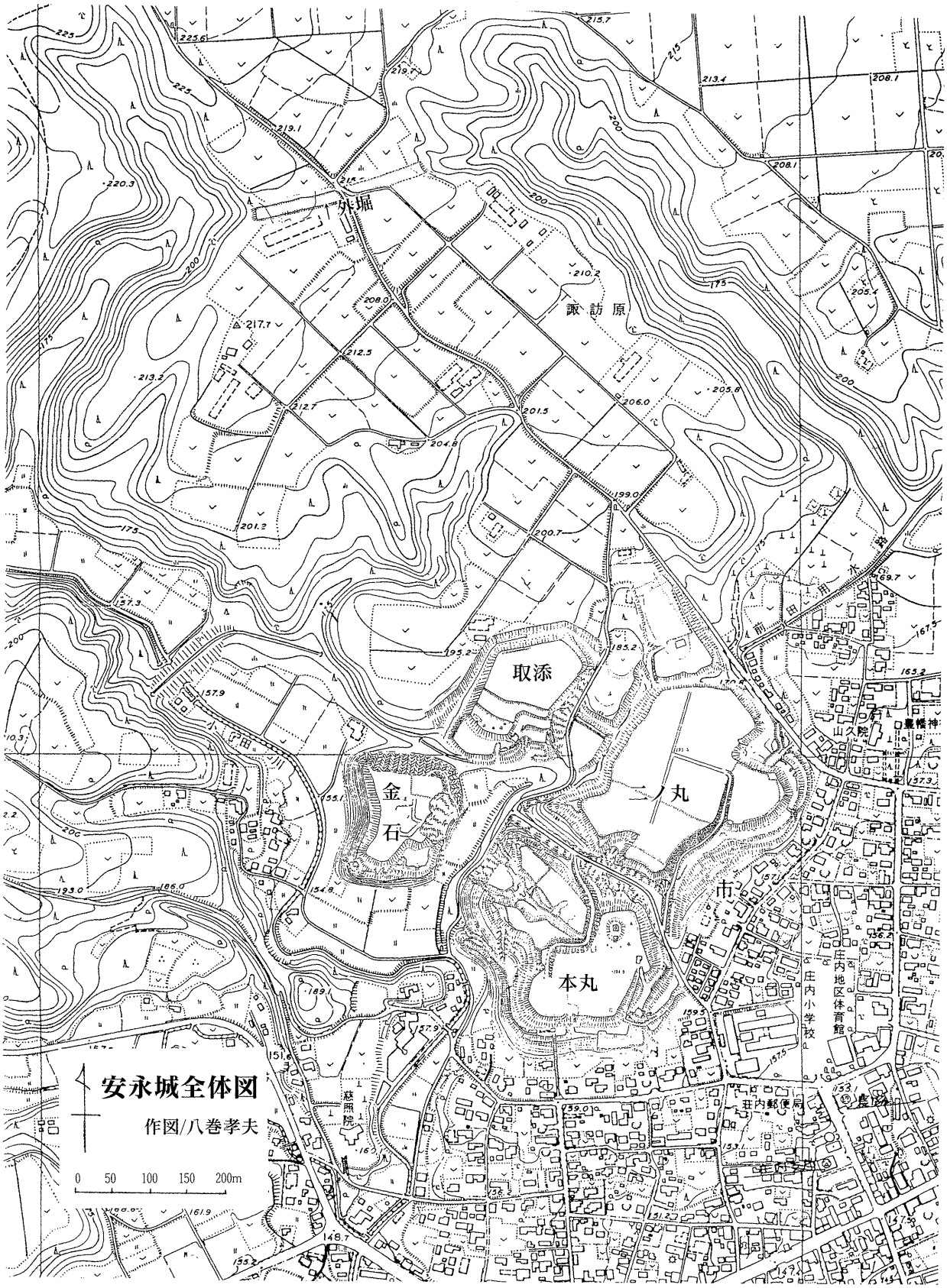

安永城全体図
作図/八巻孝夫
0 50 100 150 200m
外堀
諏訪原
取添
金石
二ノ丸
本丸
市
庄内小学校
庄内地区体育館
庄内郵便局
慈照院

図23　安永城全体図

9．野々美谷城跡（ののみだにじょうあと）

都城市野々美谷町占城にある比高20mの丘陵上に野々美谷城は位置する。城のすぐ東には大淀川が流れ、水運を直接把握し得た立地である。この城の名は古く、すでに応永元年（1394）の文書には「野々三谷城」が落城したことが記される。大永から天文年間には、北郷氏と伊東氏との激しい攻防が繰り返されたが、天文11年（1542）には北郷忠相が野々美谷城を攻略し、天正15年(1587)からは伊集院氏の持城であった。慶長４年（1599）の庄内の乱でも攻防が重ねられ、攻め手側の戦死者は58人にのぼった。

『庄内地理誌』の「野々三谷城図」によれば、城は「諏訪(方)城」、「平城」、「尾崎城」、「龍頭城」、「八幡城」、「石垣城」、「倉持城」、「西搦」、「取添」など12の曲輪があった。現在は、５つの曲輪が残され、完全な状態なのは平城と八幡城のみである。平城はもっとも保存がよい。西側の諏訪城との間の堀に面して２m程の土塁を備える。しかし、諏訪城の方が曲輪面がはるかに高く、曲輪内は見通されてしまう。先述の絵図では、平城と諏訪城の間の堀底道を大手としており、道に対する備えであろう。

諏訪城は西側半分を土取りによって失う。西搦は踏査時点ではなお曲輪上の遺構はよく残されていた。八幡城は西側の搦に対して土塁をもつ。曲輪面は２段になっており、東側の一段低い帯曲輪をめぐらす。帯曲輪の北端には八幡城にはいる出入り口が確認される。倉持城は曲輪西側の高土塁のみが残る。倉持城は八幡城の北東部分と地つづきになっていたことがわずかな痕跡からわかる。また、八幡城との間の堀は逆Ｌ形に曲がりながら、倉持城側に向かってしだいに浅くなっており、スロープ状の堀底道となって倉持城内につながっていたと推測できる。図示した範囲の南側にも絵図によれば曲輪がつづいていた。現地でも堀の痕跡を見ることができ、もうひとまわり城域が広かったことが確実である。（千田嘉博）

野々美谷城

桑畑光博・千田嘉博　踏査、千田作図

図24　野々美谷城跡平面図

10. 志和池城跡・森田陣跡

都城市古陣・森田原・古城・外堀・麓・陣などにわたって所在する壮大な城郭と陣城の跡である。両城の遺構の展開した範囲は2000m×500mの範囲にも及び、全国的にも最大規模の陣城遺跡といえる。踏査図のうち、遺構ラインにケバを付したものは、現況の地表面観察により確認可能な遺構を示す。一方、線のみで表記したものは、現在遺構は埋没して、地表面から観察できないものを、後述する絵図によって補って描いたものである。

志和池城は大淀川北側の台地端部に立地している。この部分は台地が東西方向から北東に向かって屈曲したところで、志和池の名は永享４年（1432）の文書にも見える。天文期にかけて激しい争奪戦の舞台となった。天文12年（1543）には北郷忠相が伊東氏の守る本城を攻略した。慶長４年（1599）の庄内の乱では、都之城と並んで伊集院忠真の重要拠点として使われ、志和池城をめぐって攻囲戦が行われた。

慶長４年３月に伊集院忠棟が島津家久によって殺害させられた直後から、都城一帯は、家久によって陸海路が封鎖され、忠真方は志和池城ほかに籠城することになった（重永卓爾「伊集院忠真発給文書に見る庄内事変の一齣」『南九州文化』第18号、1984年）。４月になると財部境で合戦が行われ、６月には家久方の力攻めによって山田城が落城している。

７月に入ると力攻めではなく家久方は忠真方の諸城を包囲して「ゆるゆると城中を痛め、ひとりころぶ様」という作戦に転換して、封鎖を一層強化した。10月２日には島津家久が庄内に着陣し、志和池城と野々美谷城の間を分断する森田陣などが急速に補強された。そして志和池城の西側に隣接した位置にまで包囲を狭めた北郷陣も構築された。さらに志和池城から谷を挟んだ北東の天神ヶ尾の台地上にも包囲陣が置かれた。大淀川には志和池城の上・下流の２ヶ所に網を張って船舶の航行を防ぎ、網と陣所の間には間垣を設けて包囲を万全なものとしていた。

志和池城側でも、攻囲軍の隙をついて出撃し、あるいはゲリラ戦を行い、また呪詛するなどさまざまなことを試みたが、家久方の包囲を阻止することはできなかった。10月21日には家久方の陣所の鉄砲薬より火事があり、麓の陣屋が焼失したが、大きな影響はなかった。籠城する忠真方と攻める家久方の間では、散発的に銃撃戦などが行われ、家久方に７月中に１名、10月５日に１名、10月11日に１名、11月８日に８名、翌慶長５年１月16日には４人の戦死者が志和池において記録されている。

12月になると志和池城では兵糧の欠乏が目立ちはじめ、26日には「志和池近日落去」といわれる状態にまでなった。こうした事態を打開するため、忠真方では慶長５年１月５日夕方、にわかに間垣を強襲突破して、志和池城に兵糧を運び込む作戦を実施した。しかし、家久方はよく防ぎ兵糧を追い落とした。志和池城の情勢はいよいよ切迫することになった。志和池城はそれでもなお一カ月もちこたえたが、２月５日に城内から家久に対して下城を申し入れた。

拠点城郭であった志和池城の開城を受けて、忠真方の端城６ヶ所も３月はじめには次々と自落した。忠真方の軍事的敗北は明らかであった。そして３月10日には忠真は起請文を提出して謝罪すると共に、都之城を明け渡したことによって、約1年におよんだ庄内の乱は終結した。

志和池城は、都城島津家に伝わる絵図によれば、「本丸」、「二丸」、「小城」、「西搦」、「新城」からなっていた。このうち本丸と二丸は土取りや公園化・墓地開発などによって、壊滅している。

西搦は、現在、宅地や畑として使用されている。明確な遺構としては、まず、台地西側を区切っていた堀の南端を台地端部に見ることができる。また西搦の東側塁線中央に、窪んだ堀底道状の施設があり、もともと西搦と二丸側とを結んでいた出入り口の可能性を指摘することができる。

この西搦は、いうまでもなく、本来、志和池城の外郭であったが、庄内の乱のなかで家久方に攻略され、

本丸や二丸といつた城内を見通し監視するための「勢楼」が設置された。具体的に勢楼の痕跡を地表面で見ることはできないが、発掘調査を行えば遺構を明らかにすることができるであろう。こうした勢楼は、熊本県山田城の発掘調査と絵図によって構造が判明しており、また島原の乱の原城を包囲した幕府軍の陣所跡のみかん畑のなかには土台を見ることができる。

小城・新城は、ひじょうによく遺構が残る。小城は二丸と新城の間に位置し、現在は起伏の激しい山林となっている。地形的には北側に広がっていく台地の南端部であり、北に向かってきわめて厳重な防御施設を幾重にも設置していた。まず、新城との間に東西方向の大きな堀を掘削した。この堀の中央には仕切りの土塁が伸びており、2重堀となっていた。部分的に、堀と直交する向きの土手が南側の堀に見られる。堀の中央やや東よりには土橋をかけており、新城と小城が連絡するための出入り口があった。また堀の南側には幅広の土塁が添えられ、東端部は櫓台となって大きく北側の堀に張り出した。

先の出入り口から南には2本の南北方面の溝が伸びている。連絡壕のようなものであろうか。40m程南に進むとふたたび東西方向の堀が現れる。この堀を背にして南側に大きな曲輪が段々になって連なっていた。この部分は中央の南北堀によって大きく東と西に区分されていた。

新城は小城の北側に展開しており、台地側に大きく突出した場所であった。庄内の乱に際して増築されたものであろうか。区画整理によってかなりの部分の堀が埋め立てられてしまっているが、南西の台地端部の取りつき部、東西堀の中央を分断する南北道の西側、新城の北東角で堀が大きく屈曲して竪堀状になって南に下がっていくところを地表面から確認することができる。

曲輪内は畑、山林、宅地になっているが、埋め立てられてしまった堀と同様に地下に遺構がよく残されていることは間違いない。小城と新城は、志和池城が庄内の乱の段階で大きく改修され、技巧を凝らした防御施設を備えていたことを具体的に証明する。両地区の遺構はかなりよく遺存しているが、宅地や工場などの虫食い開発が行われており、早急な保護施策が望まれる。

森田陣は、本陣（絵図では「御陣」とする）を台地が東西方向から北に方向転換した隅に置いていた。残念ながら土取りによって本陣の4分の1程度は失われている。注目すべきは本陣北側の複雑に屈曲させた堀の遺構である。何度も鍵の手に堀を折り曲げることで死角のない塁線をつくり出しており、他の陣に比べ格段に格式が高く、防御を厳重にしたことがわかる。そして、この遺構は絵図とも一致する。

本陣から東側に出るための出入り口には四角い馬出しを備えていた。本陣北側の「長寿院陣」とならんで、やはり格式が高く、防御と出撃性に優れた出入り口であった。この馬出しタイプの出入り口は、明らかに幾内の織豊政権の拠点城郭の影響を受けたもので、南九州の城づくりの技法にはなかった。

本陣西側の「重時陣（入来院又六殿陣）」も堀の一部が地表面から観察されるほか、地下に遺構が埋没している。長寿院陣の北側に展開した「諸軍勢陣」および「嶋津中務殿陣（忠豊陣）」では、東側の台地端部に沿って伸びた連絡と区画をかねた堀を見ることができる。部分的には土塁が添えられている。

大きな谷を挟んで台地崖線が東に向きを変えたところが「北郷陣」であった。絵図によれば、現況とは異なり、谷の幅は狭く、両岸をつなぐ土橋があったとする。しかし、実際には曲輪面と同じ高さで土橋があったとは考えられず、谷を下りた中にこうした施設があったのであろう。絵図にも描かれた櫓台を北郷陣の南西に確認できる。北郷陣の北側および東側の堀は地割でよくわかる。北郷陣東の堀から西栫までの空間は、当初、最前線であったはずだが、西栫が落城してからは勢楼番の控えの陣所として使用されたようである。志和池城北東の天神ヶ尾にも土塁と堀に守られた陣所が残る。「京陣」、「豊後陣」、「嶋津右馬頭殿征久陣」に相当した。現在、科長（しなが）神社、宅地である（未図化）。

これ程、合戦に際して築かれた陣城が、広範囲にわたって良好に遺存し、詳細な史料群によって跡づけられる例はまれである。志和池城・森田陣の遺跡をいつまでも伝えて行きたいものである。　(千田嘉博)

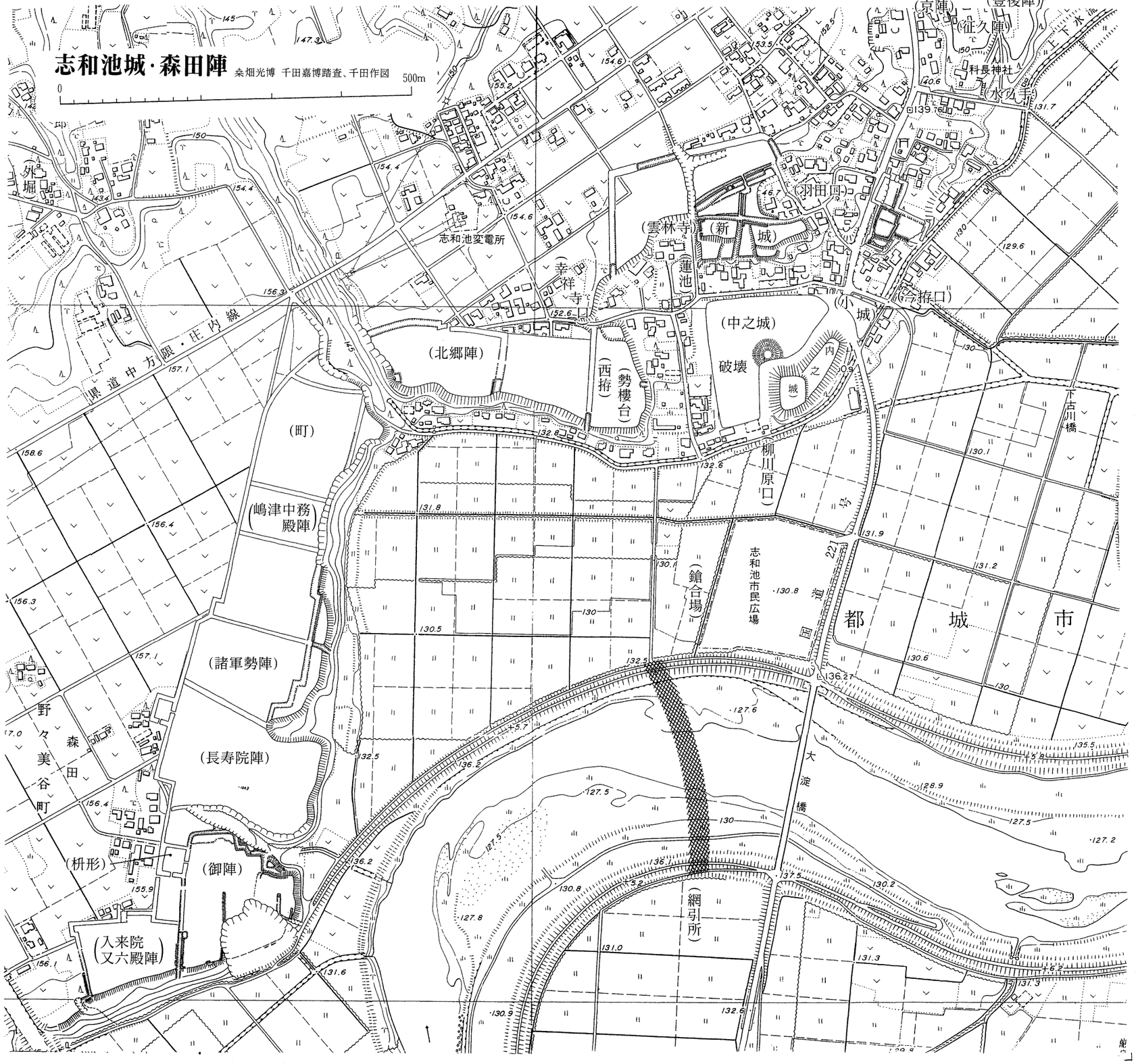


図25　志和池城・森田陣跡平面図

11. 上大五郎（かみだいごろう）遺跡

上大五郎遺跡は都城市丸谷町字上大五郎に所在する。市内北東部を東流する大淀川の支流丸谷川の右岸標高約142mの低位段丘上に立地する。発掘調査は丸谷地区の県営ほ場整備事業に伴い、平成５年11月から平成６年３月まで行われた。調査面積は約12500㎡である。

以下、既刊の調査報告書（文献17）に基づいて、検出された館跡の概要を紹介する。

館跡は、２条の溝（ＳＥ１とＳＥ２）によって略方形に区画されており、そのほぼ全域が発掘された。

外側の溝であるＳＥ１（幅２～３m）は東・南・西の三方を「コ」の字形に区画し、北側は段丘端で切れている。溝の最低面には館西面を除いて硬化面が確認され、堀状の道路としての機能が推定されている。同溝は南西コーナーでＴ字状に分かれ、南には硬化面を伴いながら約50m続く。北には約45mのび、段丘端に消える。硬化面は、南西コーナーから北へ約５mの地点で西に折れ館外へとのびる。ＳＥ１の５～９m内側を内走するＳＥ２（幅約１m）は、深さは平均して10～20cmと浅く、硬化面は認められない。４か所で土坑を伴っているが、その中で、入口部東側の円形土杭は径３m、深さ１.８mと最も規模が大きい。また、北東部が西へ約110°、北西部が東へ約120°折れ、館内部を囲み込むような形となっている。このＳＥ２とＳＥ１との間はほとんど無遺構地帯であり、土塁の存在が想定されており、ＳＥ２は土塁の内側に設けられた雨水処理的な排水溝と推定されている。ＳＥ１とＳＥ２の遺構内堆積土の断面観察によれば、おおむね溝の中位レベルにおいて、桜島を噴出源とする文明年間（1471年頃）の白色軽石の堆積が認められ、その時期にはかなり埋没が進行していたことが考えられる。また、館入口より東側のＳＥ１では、その白色軽石の上位にも硬化面が不明瞭ながら部分的に観察できるが、西側ではまったく認められない。館への入口は、ＳＥ１の南東コーナーから約38mの地点で北に向かって、硬化面を伴いながら約20mの上り勾配で設けられている。また、約８m入った地点から、約1.5m間隔で左右対称の大小の柱穴が３対並んでおり、さらに７m進むと１対の柱穴がある。これらの柱穴群は、門状の施設であると推定されている。この入口部には長方形の土坑が２基と東側の壁際に溝と土坑１基が伴っており、排水を意図して掘削されたものと考えられている。調査を担当した東憲章氏は、この門跡を含めた館の時期について、先に述べた桜島文明軽石降下前と後の２時期にまたがって存続したと推定しているが、土層断面図を詳細に観察すると門柱穴が完全に埋没した後に、同軽石が堆積しており、15世紀後半頃にはその役割を終えていたものと思われる。館に伴う建物として、24棟の掘立柱建物跡が認められているが、重複の状態からおおむね３時期にグルーピングされており、各時期７～９棟が存在していたものと推定されている。また、館構築期には中央部のやや東よりに二面に庇をもつ２間×５間の建物（SB24）と一面に庇をもつ２間×４間の建物（SB26）の主殿的建物が認められるほか、入口西側付近には２間×２間の総柱の建物（SB21）もある。館の広さについては、外側をめぐるＳＥ１に囲まれた館総面積は約4240㎡であり、内側をめぐるＳＥ２に囲まれた面積は約3150㎡である。ＳＥ１の埋土からは、14世紀前半の東播系の片口鉢や14世紀後半から15世紀前半にかけての青磁碗・白磁皿などが出土している。前述した溝と門跡の土層堆積状況からも、館の時期が15世紀後半まで下ることは考えられず、14世紀から15世紀前半にかけてと推察できる。

ちなみに丸谷川右岸において検出されたこの館については、何の記録も残されていないが、江戸時代後期（天保年間・19世紀前半）に都城島津家によって編纂された『庄内地理志』巻八十八には、当遺跡の対岸にあたる丸谷川左岸に丸谷古領主の「丸谷某屋敷跡」があったと記載されている。その古絵図によれば、同屋敷は河川流域の水田地帯（南）に面した字中崎という段丘端部を、北・東・西の三方を幅三間の堀で区画することによって築かれていたようで、内部の面積は三反と書かれ、南側の段丘端部には館への入口が描かれている。また、屋敷の北東方向には「成福寺」という寺の存在と西南方向には年神の祠も記されている。この史料にみえる屋敷跡は構造・規模ともに、上大五郎遺跡の館とよく似ている。　(桑畑光博)

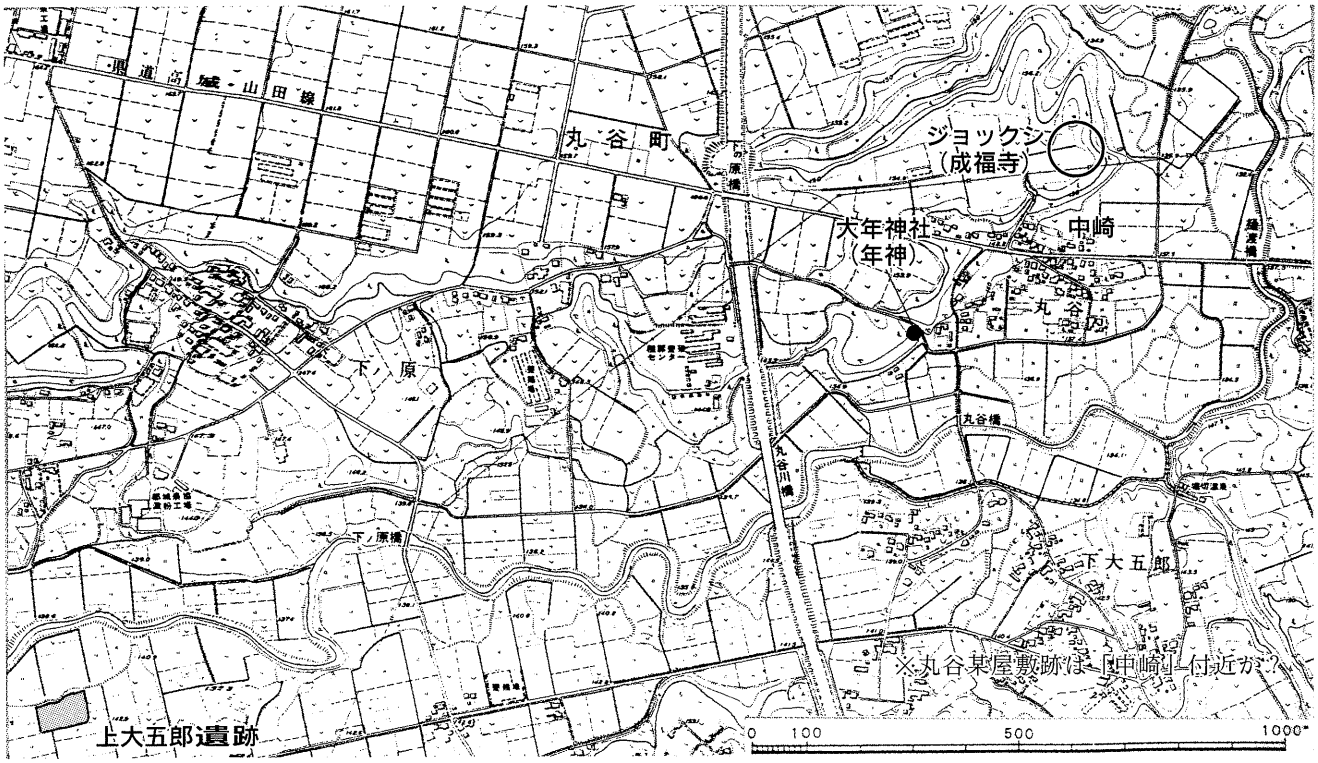


図26　上大五郎遺跡周辺地形図

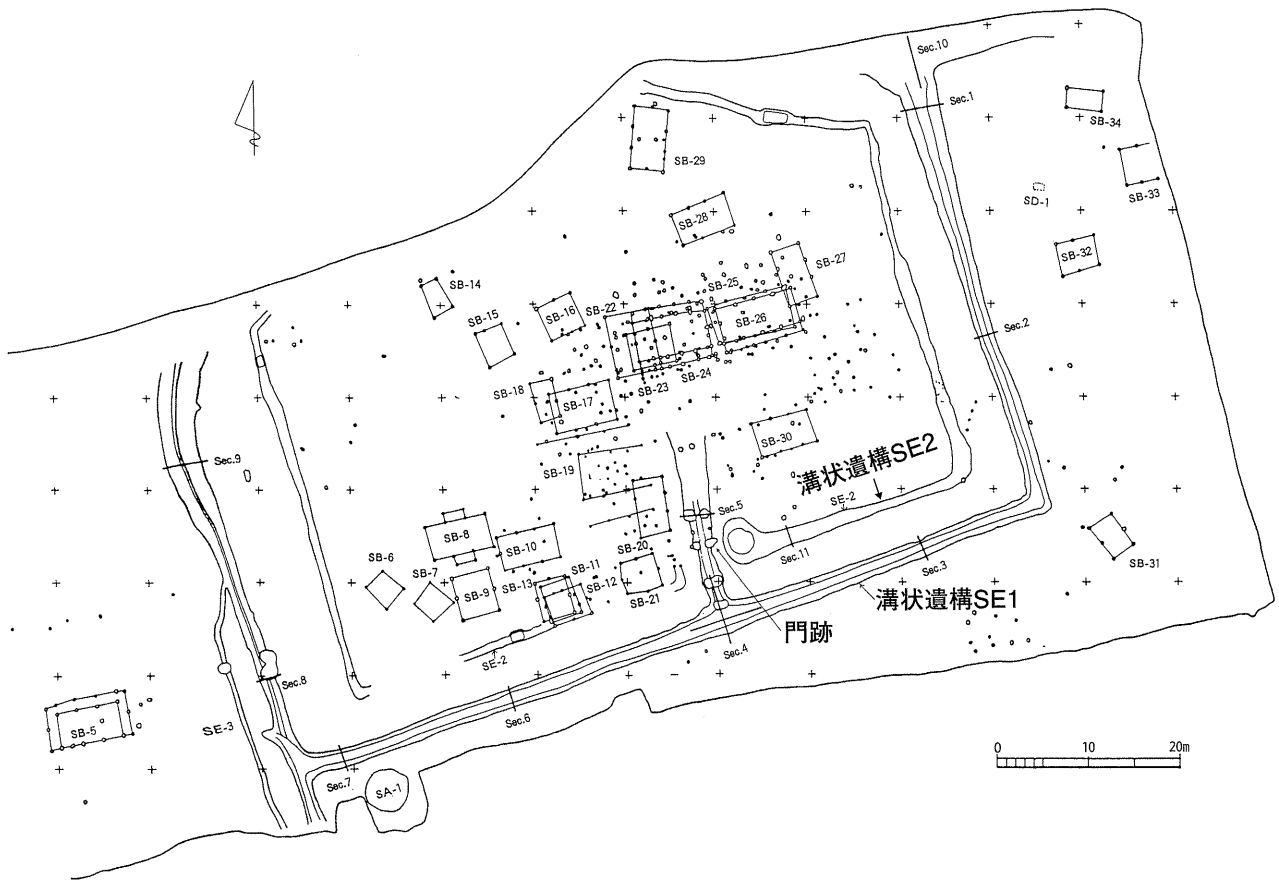


図27　上大五郎遺跡平面図　　東　憲章作図

12. 胡麻ヶ野城跡

この城跡は、都城市高野町字胡麻ヶ野に位置し、東・西・南の三方を低湿地に囲まれた台地を城域としている。北東部の台地続きの地峡部を堀切で切断することによって防御性を高め、独立丘状を呈している。丘頂部の標高は298.8m、平地との比高差38mで、現状は山林である。丘頂部に主郭を置き、南北にそれぞれ曲輪を配し、西側にも小曲輪を設けている。主郭部から南北両方向に、箱堀状の溝が走っており、おそらく通路として使われていたと思われる。また、城跡の北東部に、その通路に添うようにつくられた土塁を確認できた。1990年に実施された都城市遺跡詳細分布調査で、斜面において15世紀後半～16世紀前半の青磁、青花が表面採集されている。地元では、ここを昔から「黒木山」と呼んでおり、城跡であると伝えられている。ちなみに、原本は16世紀後半頃のものと思われる『北郷家時久都城五口人数帳写』(『都城島津家史料』第三巻　重永卓爾編　1989年）の弓場田口の項に、北郷氏の家臣として「胡麻ヶ野伊与介」という名が見られるが、この城跡一帯に出自をもつ人物の可能性がある。　（下田代清海）

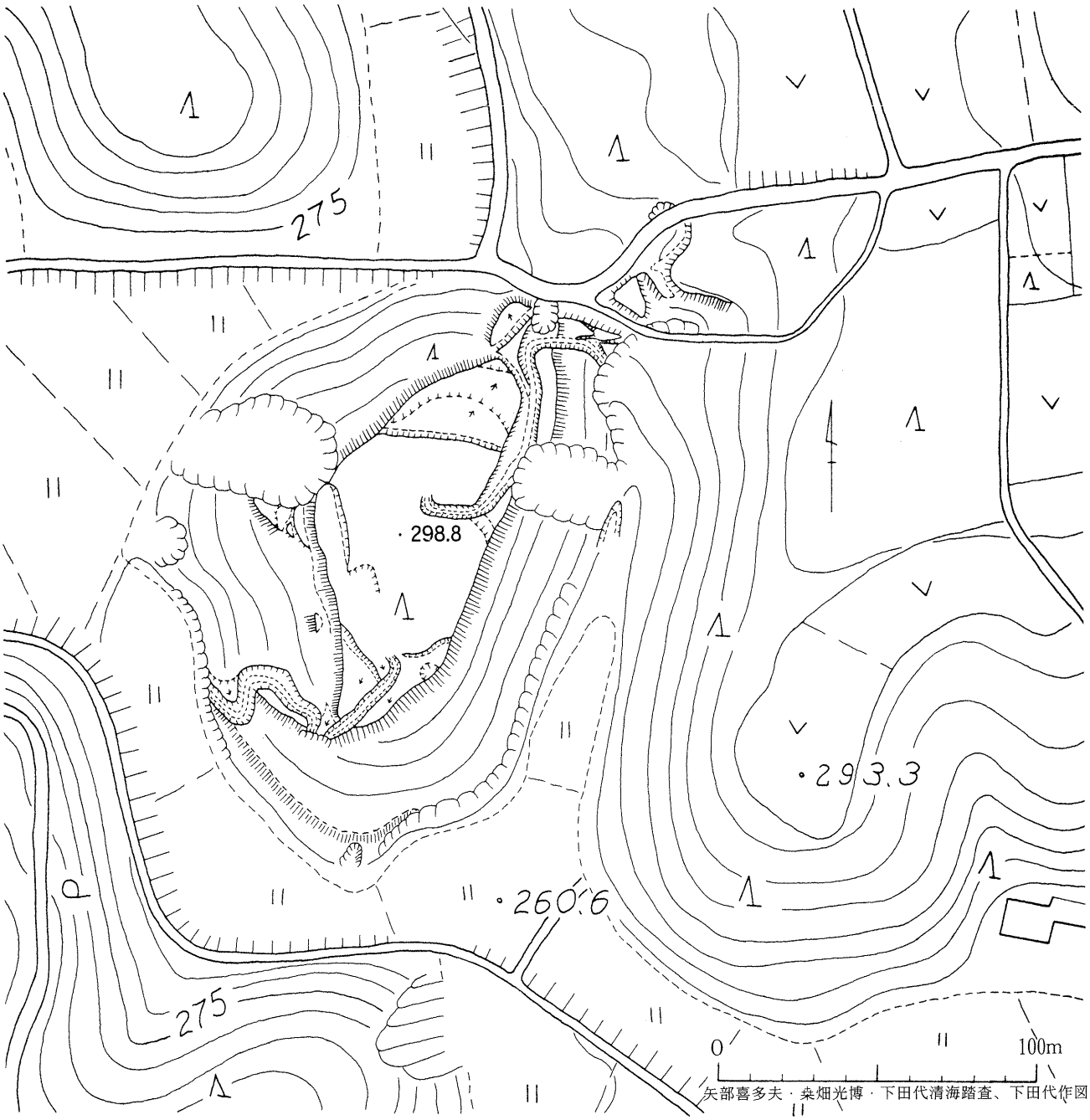


図28　胡麻ヶ野城跡平面図

Ⅳ. 都城市の中世城館関係文献一覧

〈調査報告書〉 ＊刊行年順

1 谷口武範・岩永哲夫 1983 「都城・中之城跡発掘調査」『都城市文化財調査報告書第３集』 都城市教育委員会
2 矢部喜多夫 1987 『都城市文化財調査報告書第５集 都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』 都城市教育委員会
3 児玉三郎・桒畑光博 1988 『都城市文化財調査報告書第６集 都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』 都城市教育委員会
4 矢部喜多夫・重永卓爾・寺師雄二 1989 『都城市文化財調査報告書第７集 松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』 都城市教育委員会
5 桒畑光博 1989 『都城市文化財調査報告書第８集 都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北東部）』 都城市教育委員会
6 矢部喜多夫 1989 「Ⅳ.久玉遺跡」『都城市文化財調査報告書第10集 昭和63年度遺跡発掘調査概報』 都城市教育委員会
7 桒畑光博 1989 「Ⅵ.都之城本丸跡」『都城市文化財調査報告書第10集 昭和63年度遺跡発掘調査概報』 都城市教育委員会
8 桒畑光博 1990 「Ⅳ 野々美谷城跡発掘概報－曲輪３の調査－」『都城市文化財調査報告書第11集 平成元年度遺跡発掘調査報告』 都城市教育委員会
9 桒畑光博 1990 『都城市文化財調査報告書第12集 都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北西部）』 都城市教育委員会
10 矢部喜多夫 1990 「安永城址試掘調査報告」『都城市文化財調査報告書第12集 都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北西部）』 都城市教育委員会
11 桒畑光博 1991 「Ⅱ.都之城跡（主郭部）－第１～４次調査概報－」『都城市文化財調査報告書第13集 平成２年度遺跡発掘調査概報』 都城市教育委員会
12 重永卓爾 1991 『都城市文化財調査報告書第15集 都之城取添遺跡発掘調査概報』 都城市教育委員会
13 重永卓爾・横山哲英 1992 『都城市文化財調査報告書第18集 瀬戸ノ上遺跡』 都城市教育委員会
14 横山哲英 1992 『都城市文化財調査報告書第19集 金石城跡』 都城市教育委員会
15 横山哲英 1994 『都城市文化財調査報告書第27集 上ノ園第２遺跡』 都城市教育委員会
16 重永卓爾 1994 『都城市文化財調査報告書第29集 ニタ元遺跡』 都城市教育委員会
17 東 憲章 1995 『都城市文化財調査報告書第31集 丸谷地区遺跡群・上大五郎遺跡』 都城市教育委員会
18 桒畑光博 2002 『都城市文化財調査報告書第58集 横市地区遺跡群 江内谷遺跡・坂元B遺跡・加治屋B遺跡（第１次調査）』 都城市教育委員会

〈資料紹介・論文等〉 ＊執筆者五十音順

19 木島孝之 1992 「九州における織豊期城郭－縄張り構造に見る豊臣氏九州経営－」『中世城郭研究』第６号 中世城郭研究会
20 桒畑光博 1996 「日向国都之城跡の城域について」『大河』第６号 大河同人
21 児玉三郎 1996 「史跡・石造物」『都城市史』別編民俗・文化財編〔祝吉御所跡・都之城跡・志和池城跡・安永城跡・野々美谷城跡・梅北城跡・姫木城跡・森田御陣跡〕都城市
22 佐々木綱洋 1998 「都之城古絵図」『歴史資料館館蔵品選集』 都城歴史資料館
23 重永卓爾 1986 「日向国庄内に於ける中世城郭について－都城盆地の中世城郭史序説－」『南九州文化』第29号 南九州文化研究会
24 重永卓爾 1992 「中世の安永に関する文献に依る若干の考察」『都城市文化財調査報告書第19集 金石城跡』都城市教育委員会
25 千田嘉博 1997 「新宮城の歴史的位置」『日向の城を読む』No.３ 宮崎県教育庁文化課
26 立山健次 1969 『都城盆地内主諸城』
27 福島金治 1996 「戦国時代の都城の町と村」『市史編さんだより』第２号 都城市市史編さん室
28 平凡社編 1997 「都城市」『宮崎県の地名』〔祝吉御所跡・都之城跡・志和池城跡・安永城跡（金石城跡）・野々美谷城跡・梅北城跡〕
29 北郷泰道 1992 「北郷氏における中世城郭とその社会（その壱）－山田城跡と自分史－」『宮崎考古』 石川恒太郎先生追悼論文集 宮崎考古学会
30 北郷泰道 1994 「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』第20号
31 都城市教育委員会 1989 『都城市の文化財』〔祝吉御所跡・都之城跡・志和池城跡・安永城跡・野々美谷城跡・梅北城跡・森田御陣跡〕
32 宮崎県埋蔵文化財センター 1997『日向の城を読む－山城を見る・聞く・歩く－』〔都之城跡・野々美谷城跡・安永城跡（金石城跡）〕
33 宮崎考古学会 1990 『平成２年度宮崎考古学会秋季研究会 日向の中世山城の現状と課題』〔都之城跡・野々美谷城跡・安永城跡（金石城跡）〕
34 山田 渉 1988 「都城市域の歴史的環境の概要」『都城市文化財調査報告書第６集 都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』
35 八巻孝夫 1991 「都之城について 縄張検討による現状把握」『都城市文化財調査報告書第13集 平成２年度遺跡発掘調査概報』
36 八巻孝夫 1991 「日向国都城の曲輪の屋敷割」『戦国史研究』第22号 戦国史研究会
37 八巻孝夫 1992 「安永城の縄張調査」『都城市文化財調査報告書第19集 金石城跡』 都城市教育委員会
38 横山哲英 1992 「金石城跡発掘調査」『庄内』第４号 庄内の昔を語る会
39 米沢英昭 1996 「城郭研究の現状［宮崎県］」『南九州の城郭』第１号 南九州城郭談話会
40 米沢英昭 1996 「日向における文献資料と城郭」『南九州の城郭』第２号 南九州城郭談話会
41 米沢英昭 1998 「森田御陣図について」『歴史資料館館蔵品選集』都城歴史資料館
42 米沢英昭 1998 「都城市森田御陣について（前編）」『南九州の城郭』第９号 南九州城郭談話会
43 米沢英昭 1999 「都城市森田御陣について（後編）」『南九州の城郭』第10号 南九州城郭談話会
44 若山浩章 1995 「中近世城郭関係史料目録(1)」『宮崎考古』第14号 宮崎考古学会
45 若山浩章 1996 「中世城郭と荒神」『宮崎県史しおり』史料編近世５ 宮崎県

城館写真

写真2　上ノ園第2遺跡

写真3　松原地区第Ⅰ遺跡

写真4　都之城跡（1988年撮影）

写真5　梅北城跡（1997年撮影）

写真6　安永城跡（1994年撮影）

写真7　野々美谷城跡（1995年撮影）

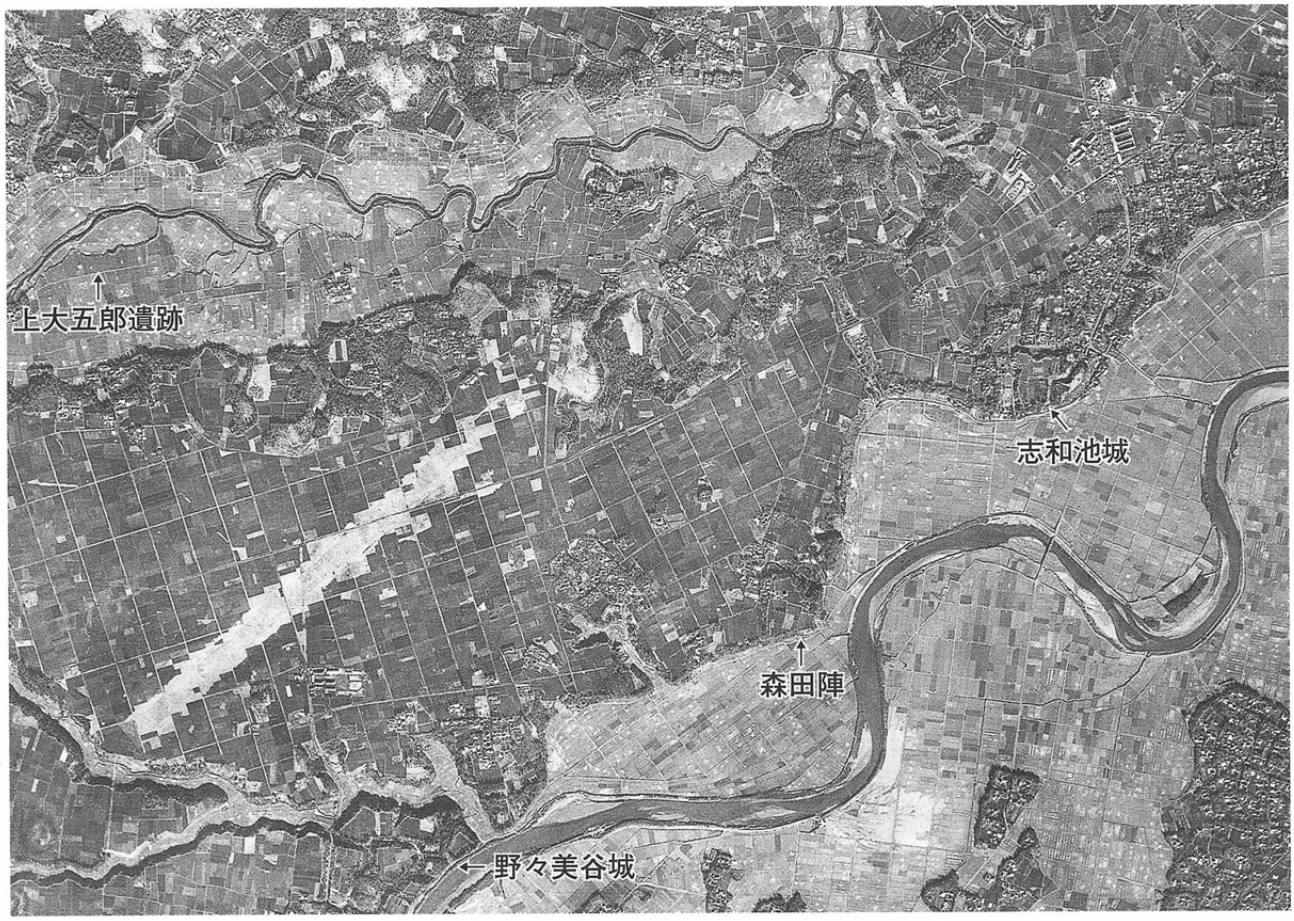


写真8　志和池城跡・森田陣跡周辺（1947～1948年、米軍撮影　M24-A-22 No.10の一部を拡大）

写真9　上大五郎遺跡

都城市文化財調査報告書第45集

都城市の中世城館

初版　平成10年３月31日
改訂　平成16年１月30日

編集　都城市教育委員会
発行　都城市姫城町６街区２１号
TEL(0986)23-9547　FAX(0986)24-1989
印刷　㈲都城新生社印刷
宮崎県都城市都北町７２８４-１
TEL(0986)38-3500　FAX(0986)38-4187